

東彼杵町文化財調査報告書第1集

# 川井川内遺跡

—彼杵中央地区遺場整備事業にかかる調査—

1986

長崎県東彼杵町教育委員会

東彼杵町文化財調査報告書第1集

# 川井川内遺跡

—東彼杵町法音寺郷所在の中世遺構—



長崎県東彼杵町教育委員会



## 発刊にあたって

このたび、東彼杵町中央開場整備に伴う埋蔵文化財の緊急調査として法音寺郷川井川内遺跡の調査結果報告書を県費補助により刊行することになりました。

法音寺郷は、かつて名前が示すとおり、むかしから、尼寺があったと言い伝えられ、現存する天満神社の周辺には宝鏡印塔や五輪塔が散在し当時のおもかげを残していましたが、本格的な発掘調査はなされておりませんでした。本調査の結果、階段上の水田より柱穴や、中国製輸入陶磁器、朝鮮産陶磁器等が出土し中世時期の遺跡であることが判明し、そしてこれら出土品が当時の庶民には手に入ることの出来ないものや全長27mに及ぶ石垣が背後の山と大村湾を一望する位置から出土したことは法音寺の地名に由来する寺院が存在したと考えられ、本町の古代文化を解明する貴重な資料となりました。本報告書が今後の埋蔵文化財に対する認識と理解、更に文化財保護行政の一助になれば幸いと存じます。なお、今回の調査にあたりご指導ご助言をいただいた県文化課の諸先生をはじめ御協力いただいた関係者の方々に対し深く感謝を申し上げます。

昭和61年3月

東彼杵町教育長 喜々津 前 勝

## 調査関係者

### 東彼杵町教育委員会

喜々津前勝 教育長  
今道留夫 前教育長  
池田省三 教育次長  
構 豊 総務係長  
松木恵子 事務史員  
山口巡子  
波戸口利勝 社会教育主事

### 長崎県北振興局耕地部土地改良課

### 長崎県文化課

安楽 効 文化財保護主事(調査担当)  
町田利幸 文化財調査員 ( )  
川畑敏則 研修員 ( )

### 調査協力者

渡辺由里子・平戸静・小山美樹

### 調査外業者

川原雅之助・林原安男・山下久義・白丸昭二・松野信太郎・二瀬円吉  
林原正和・林原節子・前平久子・山下清子・松野希光子・原アキ子  
入江あけみ・二瀬アツ子・二瀬ヨリ子・川原カズエ・川井フミ子  
山下マサ子・谷口昭子・林原久代・川井ヨシ子・松野京子

調査中は法音寺郷川井川内地区の集会施設を利用させていただき、また地区の方々には農繁期にもかかわらず、万障繕り合わせて作業を遂行していただいた。記して謝意を表します。

## 例　　言

1. 本書は、東彼杵町教育委員会が昭和60年10月15日～24日に実施した、彼杵中央地区廻場整備事業に伴う長崎県東彼杵町法音寺郷川井川内所在の、川井川内遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は東彼杵町教育委員会が主体となり、県北振興局と県文課が対応し、範圍確認調査を昭和60年7月8日～13日まで安楽と川畠が担当し、本調査を安楽と町田が担当した。
3. 本書の記録は全員で行い、執筆は分担し各項の文末に記したとおりである。
4. 石垣遺構の実測については調査が短期間だったこともあり、県文課の藤田、久原、川畠の諸氏の協力を得た。
5. 先に実施された彼杵古墳の周辺分布調査において遺物が採集されていたので、藤田和裕氏に付録としてまとめていただき集録した。
6. 本書に関する遺物および記録類は、県文化課が保管の任にあたっているが、東彼杵町に移置の予定である。
7. 本書の編集は安楽による。

## 本文目次

I 調査に至る経緯	1	(安楽 勉)
II 遺跡の地理的・歴史的環境		
(1) 地理的環境	3	(安楽 勉)
(2) 周辺の遺跡	4	(町田利幸)
(3) 中世から近世への動向	9	(安楽 勉)
III 調査		
(1) 調査の概要	12	(安楽 勉)
(2) 土層	15	(　　)
(3) 遺構	15	(町田利幸)
(4) 出土遺物		
1 繩文時代の遺物	20	(川畠敏則)
2 中世の遺物	20	(　　)
3 近世の遺物	27	(　　)
(5) 法音寺郷所在の青溫石製石塔について	30	(安楽 勉)
IV おわりに	33	(安楽 勉)
一付一		
彼杵川流域の古墳	35	(藤田和裕)
彼杵川古墳群出土の遺物	37	(　　)

## 挿 図 目 次

第1図 調査区域図	2
第2図 彼杵周辺地形分類図	3
第3図 東彼杵町遺跡地図	5
第4図 中世における主要城郭分布図	10
第5図 B—5、C—5南側土層実測図	13
第6図 グリットおよび遺構配置図	13
第7図 石垣遺構および土層図	17
第8図 石礎実測図	20
第9図 輸入陶磁器実測図(1)	21
第10図 輸入陶磁器実測図(2)	23
第11図 国内産の中世遺物実測図(1)	24
第12図 国内産の中世遺物実測図(2)	26
第13図 その他の中世遺物実測図	27
第14図 近世の遺物実測図	28
第15図 法音寺郷所在の青溫石製文安の祈願塔拓影	31
第16図 那川周辺および東彼杵周辺の中世寺院と城跡	34
第17図 ひさご塚古墳周辺地形図	35
第18図 ひさご塚古墳墳丘実測図	36
第19図 彼杵川古墳群出土の遺物	38

## 表 目 次

表1 東彼杵町遺跡地名表	7
表2 出土した中世の土器の総点数と比率	29

## 図版目次

図版1	遺跡遠景	39
図版2	石垣遺構全景	40
図版3	石垣遺構部分	41
図版4	試掘調査時の遺構	42
図版5	土層および調査風景	43
図版6	遺物出土状況	44
図版7	輸入陶磁器(1)	45
図版8	輸入陶磁器(2)	46
図版9	国内産の中世遺物(1)	47
図版10	国内産の中世遺物(2)	48
図版11	その他の中世遺物	49
図版12	近世の遺物	50
図版13	川井川内出土の宝鏡印塔	51
図版14	ちよいのどう所在の石塔群	52
図版15	町内所在の石塔群(1)	53
図版16	町内所在の石塔群(2)	54
図版17	りさ二塚古墳・ワレ櫻現塚古墳	55
図版18	彼杵川古墳群	56
図版19	彼杵川古墳群出土の遺物	57

## I 調査に至る経緯

長崎県においては、国の農政の基本方向を踏み、昭和58年度を初年度とする10ヵ年間の第三次土地改良長期計画を策定し、農業生産基盤整備を各地区で推進している。

東彼杵町においても県営圃場整備事業として彼杵中央地区が計画された。対象区は彼杵川上流域の三根郷、法音寺郷、菅無田郷に及ぶ受益面積82haである。この中で、三根郷地区には彼杵川古墳群と、上杉古墳群が水田中に点在しており、昭和57年に圃場整備事業に先立って範囲確認調査が実施され、須恵器片などが採集されている。その後、町と県耕地課、県文化課との協議では、事業の設計変更がとられ古墳群は保護されることになった。

昭和60年度は法音寺郷地区の事業が進められ、ここでは遺跡台帳24-3の木遺跡が対象となった。本来は「川井郷地」遺跡（散布地）として登録されており、国道34号線から西へ伸びた茶畑が範囲とされていた。そのため東彼杵町と県耕地課、県文化課の三者協議では、先ず範囲確認調査の結果によって対応し、調査主体は東彼杵町教育委員会となった。発掘調査は県文化課職員2名が担当し、昭和60年7月8日～7月13日の6日間にわたり実施された。

範囲確認調査は、先ず茶畑に2m×2mの試掘坑を設定したが地山層まで浅く、遺物を含む層は認められなかった。しかし下段の緩傾斜地の水田部の表面では、近世陶磁器片に混つて中国輸入陶磁である青磁、白磁片を採集した。

この地区は、法音寺郷という地名が示すように、尼寺があったと地元の人々に言い伝えがあるが、確実な場所は憶測の域を出でていない。しかし周辺には青温石製の中世の宝鏡印塔や五輪塔が存在していることもあり、このゆるやかな水田部分も調査の必要が出てきた。このため調査対象を拡大して、茶畑のすぐ下の段の西に向って張り出した水田部と、小さな沢を挟んだ北側の水田部にNo 6～9の試掘場を設定した。その結果、No 6とNo 7において柱穴とその中から瓦器、滑石製石鍋片の出土を見た。またNo 9からは、若干の青磁片と奈大から人頭大の礫を集め集石遺構が検出された。この遺構は試掘場の断面に半分出たように出土したため埋め戻しを行い保存した。

範囲確認調査の結果、遺跡としての範囲は約6,000m<sup>2</sup>が予察された。その中で、工事による削平部分は約半分の3,000m<sup>2</sup>であり、この面積をいかに保護していくかに協議の焦点は絞られた。耕地課設計担当者との間で協議が進められた結果、A地区800m<sup>2</sup>、B地区1,200m<sup>2</sup>の調整では、前者は地形の高低差が大きく、工事設計の変更が不可避なため、本割合による記録保存措置を講ずることになり、後者は上盛りによる設計変更で回避することで合意がなされた。

本調査の経費負担の問題は、農林省と文化庁の覚書第5項を適用し、農家負担分については東彼杵町により予算化され、残りの分については県北振興局が窓口となり負担した。なお調査は東彼杵町教育委員会が調査主体となり、県文化課職員2名が発掘調査を担当した。期間は

昭和60年10月14日～10月25日の約10日間実施した。なお調査の詳細な内容については後に述べる通りである。



第1図 調査区域図(1/2000)

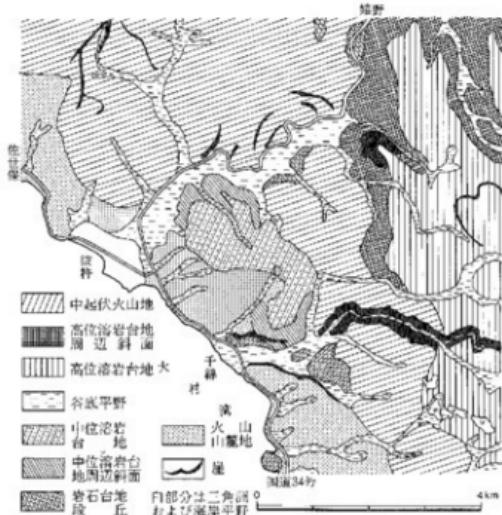
## II 遺跡の地理的・歴史的環境

### (1) 地理的環境

県央東部に位置する東彼杵町は、約330km<sup>2</sup>の広さをもつ波静かな大村湾に面し、後方は多良岳山系と虚空蔵山系に囲まれ、北は川棚、波佐見町、南に大村市、東を佐賀県嬉野町と境を接して、古来から海上・陸上交通の要衝としての役割を担ってきた地域である。

地形的には北東に聳える虛空蔵山(608.5m)が中起伏火山地として半径約4kmの円形の火山の座を保ち、東南部には彼杵川を源流とする大野原台地、赤木台地があり、これらを刻む谷に岩屋河内の峡谷や千錦峡谷が見られる。そしてこの台地周辺には多くの溜池が点在し、先土器時代の遺物も発掘されている。また地形を利用してお茶の栽培も近年盛んである。東側久境の猿坂峠を分水界とする延長6.8kmの彼杵川は、町の中央を東流し大村湾に注ぎ込んでいる。この流域は、彼杵川谷底平野と彼杵三角洲に区分され、前者は解析谷が形成され、小規模な河岸段丘を伴い水田として利用されている。下流域には、彼杵川古墳群、「杉古墳群」と呼ばれる円墳群が、さらに平野部には前方後円墳のひさご塚が位置している。後者の海岸にはカスプ状の砂州を伴っているが、全体的に転石混りの礫・砂・泥からなる河川堆積物による埋積された沖積底地が発達し、畑地や水田の生産、および住居地域としての生活の場所を提供している。しかし今一所先史時代の遺跡は発見されていないが、住宅密集地の下にあることも考えられる。

本遺跡は東彼杵町法音寺郷字川井川内の標高52m～45mの河岸段丘上に位置し、虚空藏山麓の緑辺部にある。東の前方には、大村湾をへだてた15kmの距離に西彼杵半島が望める。交通は旧長崎街道が整備され、現在は長崎市を基点とする国道34号線が彼杵宿郷江頭において佐世保へ伸びる国道205号線と分岐して、法音寺郷の遺跡東側を大きく曲り佐賀県嬉野町へ抜けている。



第2図 彼杵周辺地形分類図(土地分類基本調査図 早岐から)

## (2) 周辺の遺跡

東彼杵町には、旧石器時代から近世にいたるまでの、多くの遺跡が分布する。その中の遺跡に今回調査をおこなった川井川内遺跡があげられる。

ここでは、東彼杵町に分布（第3図・表1）する遺跡をとりあげ、当遺跡との関連を述べていただきたい。遺跡地図を見ると、町内の標高約300m付近の熊郷、中岳郷に溜池群がまとまって見られ、この部分に旧石器時代、縄文時代の遺跡の集中を見ている。その溜池群の一つ熊池周辺において、剥片尖頭器、台形様石器、尖頭器及び縄文時代の各種石器表採報告を見ている。また大村市と境を接する綿打池においても細石刃核の表採報告を見ている。このような山間部に遺跡の立地を置くものと、大村湾に面した、舌状台地端部に北から南へ遺跡の分布を示すものがある。現在舌状台地部の遺跡、大久保、里遺跡<sup>41</sup>の調査がおこなわれており、各遺跡よりナイフ形石器、台形石器、縄文土器、石鏃等多数の遺物出土を見ている。

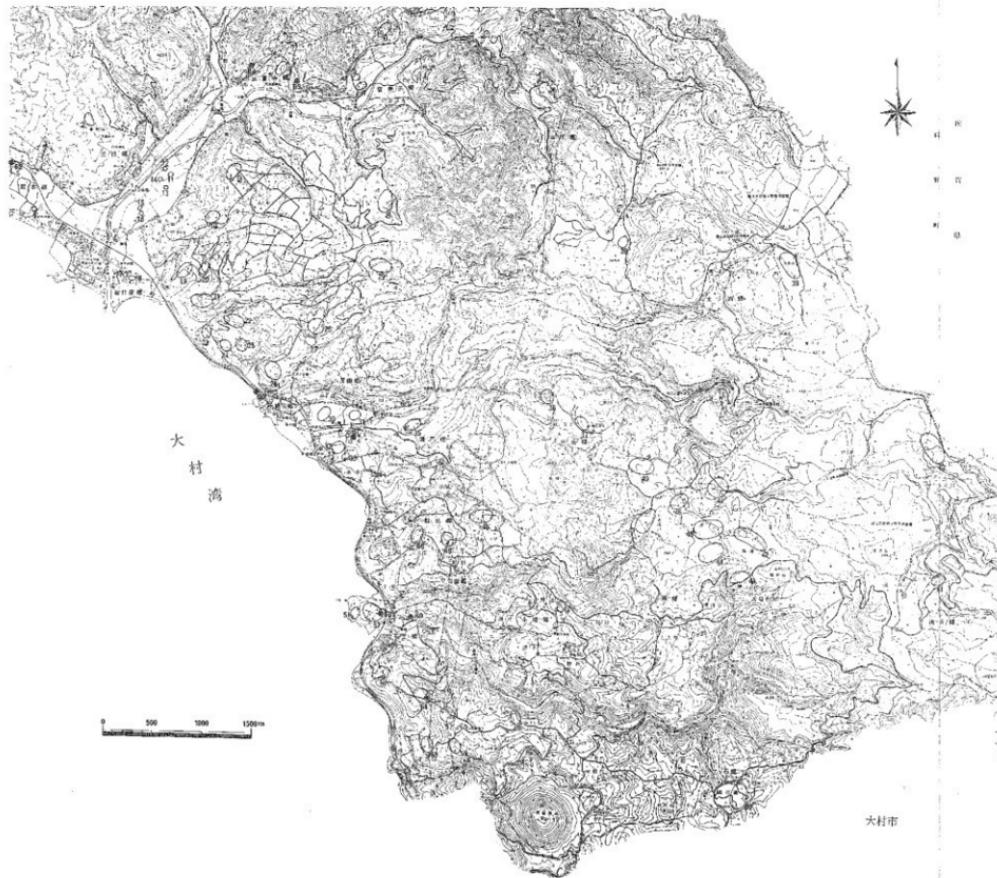
町内の弥生時代の遺跡は知られていないが、大村市富の原遺跡からは弥生時代中期から後期にかけての墓地群が発見され、剣銅品に鉄戈を出土しており当町との関連遺跡の発見が期待されるところである。

古墳時代における遺跡の分布状況は、町中心部背後三根郷に広がる標高10m～15mの扇状地に古墳の集中を見ており、ひさご塚古墳<sup>42</sup>は県の指定を受けた前方後円墳である。その他に彼杵川古墳群第1号～第4号墳、上杉古墳群1号～2号墳、ワレ櫛見塚古墳、瀬戸古墳、等が、分布しており、古墳時代後期における群集墳のありかたを知る上で貴重な資料である。

次に中世頃になると、山城の築城が知られるようになり、町内では、串ノ島城、松岳城、重の城<sup>43</sup>が知られているが、一部分紹介すると、里郷串島にあったと伝えられる串ノ島城は、南北朝時代に、東彼杵周辺の領主であった江申三郎入道の居城といわれ、大村湾に突出した岬に築かれ、標高約26m。頂部は平坦な地形をなし、木丸付近とみられるところには、石垣が一部残り、城の大手とみられる所には巨石が残る。現在は、ミカン、イモ、茶などの作物が作られ農業用地として利用されている。

次に戦国時代に入って、大村純伊が、有馬氏に敗れその後領地回復のため兵を挙げ、攻め落とした城が、松岳城といわれるものである。三根郷に所在し、標高224mを測り、三根郷周辺、大村湾海上、および川棚町を望む高所に設けられているため、陥しい砦をなし、守りやすく、攻めにくい山城である。また佐賀県との県境の坂本郷に重の城があり、標高約258mの頂部を山城として構築していたとされる。大村純忠の頃に、後藤貴明（大村氏の実子）龍造寺らに対する大村領の防備のために設けられた一つとされ、自然の地形を利用したかなり陥しい砦であったと見られるが、現在は山林となり、わずかに石垣を一部残すのみである。

その他に宿郷にあったとされる小高城、瀬戸郷に伝えられる小峰城等いずれも、山城ながら、町内に5ヶ所の城跡を散見することができるものである。



第3図 東波杵町地図(1/40,000)

番号	名 称	種 别	時 代	所 在 地	番号	名 称	種 別	時 代	所 在 地
1	島津五輪塔群	石 塔	中 古	藏本郷島田	36	寺木台地遺跡	散在地	繩 文	中岳郷広間平
2	松 岳 城 山 墓	山 墓	・	三根郷	37	三井本場遺跡	・	・	・ 三井本場
3	川井川内流域 散在地	視 文	法音寺郷宇田井川内	38	太ノ原 遺跡	・	先・朝	太ノ原郷太ノ原	
4	菅無田B 造跡	・	・	菅無田郷菅無田	39	足 形 遺 跡	・	・	遠日郷足形
5	菅無田A 造跡	・	・	・ 菅無田	40	弓のまる池遺跡	・	・	中岳郷弓のまる池
6	高 古 遺 跡	先・撲	碧水郷高古(こうき)	41	幸 小 法 跡	・	繩 文	・ 幸山山	
7	並(かわね)の城	山 墓	中 古	・	42	幕 提 遺 跡	・	元・朝	無添郷幕
8	早 山 遺 跡 敷布地	視 文	望無田郷早山	43	藤 部 遺 跡	・	・	・	
9	牛 ノ 頭 遺 跡	複合遺跡	・	赤水牛ノ頭(うしのと)	44	菅 谷 法 跡	・	繩 文	・ 茅谷
10	赤 木 遺 跡 敷布地	・	三根郷赤木	45	中 池 遺 跡	・	先・朝	中岳郷中池	
11	吉野町古墳群4号墳	古 墓	古 墓	・ 上杉	46	四 ヲ 池 遺 跡	・	繩 文	嘉都大久保中吉野町4号
12	吉野(古後那第5号墳)	・	・	・ 上杉	47	三井本場遺跡	・	先・朝	中岳郷三井本場
13	許町15号墳(第2号墳)	・	・	・ 上杉	48	八 雜 遺 跡	・	・	駒場郷駒地
14	赤井川沿岸遺跡1号墳	・	・	・ 上杉	49	野 田 遺 跡	・	・	・
15	上杉古墳群1号墳	・	・	・ 上杉	50	大 久 保 遺 跡	・	・	・
16	上杉古墳群2号墳	・	・	・ 上杉	51	本 島 古 墓	古 墓	古 墓	里塚事の島
17	サン福原塚古墳	・	・	御前吉金谷	52	和島遺跡・半島城	散在地	先・朝	・ 事の島
18	ひ ご 塚 古 墓	・	・	吉金谷	53	加 能 緑 石 墓	古 墓	平 安	・ 平
19	松 山 A 造跡	敷布地	先・撲	渡竹宿郷松山	54	集 連 遺 跡	散在地	元・朝	・
20	松 山 B 造跡	・	・	・ 松山	55	下越中筋古墳群	古 墓	・ 宇賀田	・
21	名 切 C 造跡	・	視 文	佐井宿郷名切	56	舞 ノ 久 保	散在地	繩 文	一つ石郷舞ノ久保
22	名 切 C 造跡	・	先・撲	・ 名切	57	平 先 高 野	・	先・朝	・ 平野高野
23	名 切 A 造跡	・	・	・ 名切	58	一ツ石台地造跡	・	繩 文	・ 台地
24	名 切 H 造跡	・	・	・ 名切	59	太田代池遺跡	・	・	人田代池
25	名 切 D 造跡	・	・	・ 名切	60	猪 打 池 遺 跡	・	先・朝	・ 猪打池
26	外 国 遺 跡	・	視 文	子持宿	61	久 保 造 跡	・	繩 文	遠日郷字下通久保
27	平(ダイヤ)A道跡	包 袋 地	先・撲	・ 墓立女子墓字園	62	白 貞 法 跡	包 袋 地	先土器	・ 大野原
28	平 B 遺 跡 敷布地	・	・	・ 墓立女子墓字園	63	法音寺五輪塔	石 塔	中 古	法音寺郷宇田井川内
29	赤 水 池 遺 跡	・	視 文	・ 赤木池	64	62年4月29日開拓	・	・	・ 田神川内
30	宮 田 A 遺 跡	・	・	・ 宮田	65	安全寺五輪塔	・	・	藏本郷大安
31	宮 田 B 遺 跡	・	・	・ 宮田	66	牛ノ頭丘五輪塔	・	・	千錦地郷西面
32	小 蘭 城 滅	中 古	・	・ 蘭郷	67	清心寺天輪塔	・	・	・ 清心
33	源 戸 古 墓	古 墓	古 墓	源戸郷源戸	68	江の串五輪塔	・	・	・ 里塚事の島
34	菅 田 カリシタシ真跡	蕃 蔵	近 世	・	69	尼 寺 五 輪 塔	・	・	・ 寺場
35	小 芹 城	城 跡	中 古	・	70	北 墓 五 輪 塔	・	・	・ 大道

表1 東伏作町遺跡地名表

また中世の遺物として滑石製五輪塔が、法音寺郷、巣本郷、千錦宿郷、宿郷、里郷の各町内に残存している。これは当遺跡より出土の遺物、遺構と同時期頃のものとみられると同時に、残存する五輪塔群の銘および、地名との関係から寺跡の存在を求める資料となるものである。<sup>4</sup>

次に近世における宗教関係で、現在瀬戸郷に残るキリスト教墓碑があげられる。これは、江戸時代のキリスト教禁教政策以後のもので、自然石に花十字紋、一瀬ジュアン、元和七(1621)年銘が記されており、天正二(1574)年の大村純忠による家臣領民キリスト教改宗後の影響をこの時期まで残していた貴重な資料といえるものである。<sup>5</sup>

以上が、川井川内周辺における遺跡であるが、彼杵川古墳群および中世石塔については、各章に詳細に述べられる。(町田)

註1. 久原巻二、川畠敏則氏表採

2. 藤田和裕氏表採

3. 藤田和裕氏教示、大久保遺跡は現在整理中である。

4. 高野晋司氏教示、里遺跡は現在発掘調査中である。

#### 参考文献

1. 稲富裕和「富の原遺跡群確認調査概報」大村市文化財調査報告第4集

長崎県大村市教育委員会1983

2. 藤田和裕「ひさご塚古墳」「長崎県埋蔵文化財調査集報III」長崎県文化財調査報告書第50集

長崎県教育委員会1980

3. 「日本城郭大系」第17巻 新人物往来社

4. 大石一久「大村地方における中世期石造美術について(その1)」「大村史談」第27号

大村史談会1984年

5. 長崎県教育委員会「キリスト教関係調査目録」昭和53年度歴史資料調査

6. 「おおむら史記」大村史談会青年部1982年

#### 裏表紙参考文献

1. 1~62番号は長崎県教育庁文化課藤田和裕氏を使用1984年

2. 63~70番号は大石一久「大村地方における中世期石造美術について(その1)」

『大村史談』第27号大村史談会1984年

### (3) 中世から近世への動向

古代から近世に至るまで、遺跡周辺をとりまく諸々の状況は、たえず大村の地域を中心とした中で展開してきた。ここではその流れの中で、この地域がどのようななかかわり合いをもって来たのか概観して見よう。

「彼杵」の地名が初めて出てくる文献は、天平4年(732)に撰述された『肥前国風土記』や『延喜式』、10世紀の『和名類聚抄』があげられる。

この中で『肥前国風土記』には

そのき こなり うと とうこう うまや とうこう とうめり とうこう  
彼杵の郡 郡は四所 里は七 駅は二所 燐火は三所なり

また『延喜式』兵部省式には諸国駅伝馬条として

肥前国 駅馬

基神十疋 切山 佐嘉 高来 豊水 大村 賀周 建鹿 登望 杵島 塙田 新分 般越  
山田 野島各五疋 伝馬基神五疋とある。

この中で、豊水、大村の二つの駅を松浦郡内の駅とするのか、彼杵郡とするのかの二説がある。前者は小城郡・高来駅に統けて書かれている二つの駅はそのまま松浦郡衛に通じていたと考え、後者は豊水、大村を彼杵の郡に置き、大村駅を現在の大村市、豊水駅を現在の東彼杵町とするのかの考えがあり、未だ結着を見ていらない。いずれにしろ彼杵の郡は、大村湾沿岸の広い地域を含んでいる。

8世紀初頭に完成した律令体制が崩壊していく中で、10世紀頃から地方の豪族は中央の貴族や有力な大社大寺に開発田を寄進して微税をのがれようとする傾向が強くなり荘園が成立する。肥前の国にも多くが見られるが間近なものをあげてみると、彼杵荘四百十二丁五反や伊佐早荘二百五十三丁が山現し、西彼杵半島や長崎半島、北高来郡や大村湾沿岸はこの中に含まれる。

彼杵荘は、現在の大村市郡川一帯から松原にかけてその中心があったとされるが、実態は国衙機構と結びついた寄進地系荘園であり、建長2年(1250)「東福寺文書」に九条家領としてみえるのが初見資料である。一方、長崎半島の切杭高浜で文永年間(1264~75)境界論争が起っているが、入道・品性助親王下文によって仁和寺が本家として解決を図っている。さらに視点をかえれば、彼杵荘々園領主の仁和寺は真言宗、東福寺は臨済宗であり、この地域に所在した中世寺院群の寺領域を考えるうえで手がかりを与えてくれる。

大村藩における『郷村記』は江戸時代以前に存在した庵寺を「古寺跡」として、村ごとに記載しているが、大村市北部の郡川周辺や松原にかけて「郡七山十坊と総称される寺院群の所在が示されている。これらの寺院群は、東光寺竿石銘「奉為東光院阿闍梨性元也正和五年十二月八日造立之前十一月初四日丑刻逝去在也七十六年而已」や妙光寺青畠石銘「応永元中成年十月九日過去妙光禪寺」からもわかるように、鎌倉時代末期から室町時代初期にかけて存在したことが窺われる所以である。

同じように、東彼杵町内における『郷村記』の記載を見てみると、「藏本郷に大御堂安守寺あり」とされ、現在青溫石製宝篋印塔と五輪塔が所在し「応永八年仲冬」の紀年銘がみえる。しかし郷村記の中にも古い寺院跡とされるのはここ1箇所だけで、地名として残っている法音寺の所在は不明である。

14世紀前半頃の彼杵郡内の在地武士を見てみると、現在の彼杵地区には彼杵次郎入道行連が居るが、はっきりした所在は不明である。そして千綿には千綿九郎入道純西が地頭としてみえ、小国城か小峰城あたりを本拠地としたものと思われる。さらに里郷の江ノ中島には、江中二



第4図 中世における主要城郭分布図

郎人道が申ノ島城を築城している。しかしこれらの後の消長は不明である。また南北朝から室町時代の動乱期に発生した彼杵一揆は、彼杵郡内の小地頭が連判状に署名し、所領を守るために結合したものであったが、これに参加した者は東西両彼杵郡や深江、長崎村などの全城にわたり70余名が知れ、小豪族の分立がうかがえる。東彼杵でも彼杵上伊丸や彼杵清水彦三郎紀清久、彼杵岡五郎紀清種などの名前が認められる。しかしこうした一揆も南北朝の動乱の終結によって解消に向っている。室町時代以降の戦国時代になると、島原半島一円に勢力を張っていた有馬氏は、第8代貴純の時代になると大村領内に度々攻撃を行い有馬氏の支配を及ぼすようになるが、大村氏16代の純伊は有馬氏と和解して再び大村を尊んでいた。その後はわが國最初のキリスト教として知られる第18代大村純忠の治世となり、領民6万人がキリスト教に改宗している。天正2年（1574）には宣教師ガスパレ・コエリヨの要望を聞き入れ、領内寺社の焼き打ちや石像仏の打ち壊しなどの偶像礼拝などの根絶を行っている。これにより大村周辺における仏教関係の研究に少なからずの影響を及ぼしている。

大村氏が幕藩体制の中で支配権を確立するのは慶長9年（1599）の検地であり、これより東・西彼杵、長崎、佐世保の一部が支配地と決まる。江戸時代における大村氏領の詳細については、天和元年（1681）から文久2年（1862）にかけて編纂された『郷村記』に掲載されている。それによると、長崎街道にあたる彼杵宿は佐賀方面と平戸方面の街道が、大村へ向う所で1つに交わる地点にもなり、また対岸の西彼杵半島を結ぶ海上航路の基点でもあり、特に長崎へ向う旅行者の8割は時津に上陸して長崎へ入っている。こうした交通の要衝である彼杵宿は「町内長さ一」三拾七間、商家軒端を列ねて対面する。比の堀川より東を本町と云ふ、西を金屋町と云う、両町にて家数二百八拾四軒あり……傍坂通、往還出口右の方に脇本陣、次に制札場あり、左の方に茶屋（諸大名通行の時休泊の旅館なり）次に菴屋・横目役場あり、先是左右田原也……」と記されたように結構にぎわいを見ていたようである。

昨今、近代捕鯨は先史以来続いている伝統を消そうとしているが、江戸時代の深澤儀太夫は捕鯨業を興して巨万の富を築き、大村藩の財政に大きな功献をなし、社会事業でも野岳堤や漁池の改修などの足跡を残している。今なお町内で鯨の取引きなどが盛んに行われていることは当時の伝統が引き継がれている証しである。（安楽）

#### 参考文献

- 1.『長崎県史』—古代中世編— 長崎県史編集委員会1980
- 2.『大村郷村記』
3. 濱井鉢郎「長崎県中世史の諸問題」一人村地方を中心として『大村高紀要』第2号1983

### III 調査

#### (1) 調査の概要

本調査は、試掘調査の結果に基き関係機関と事業に対する調整を図り、設計変更出来なかつた、標高52mと52.3mの2枚の水田約800m<sup>2</sup>を対象とした。表土は一斉に全面剥ぎを行つたが高い水田では直下に地山が認められたので、西に張り出した低い水田部400m<sup>2</sup>について調査を絞ることになった。地形は舌状に伸びた先端部で、隣接する水田にはかなりの段差をもつ。形状は隅丸の台形状を呈し擁壁は石積みである。

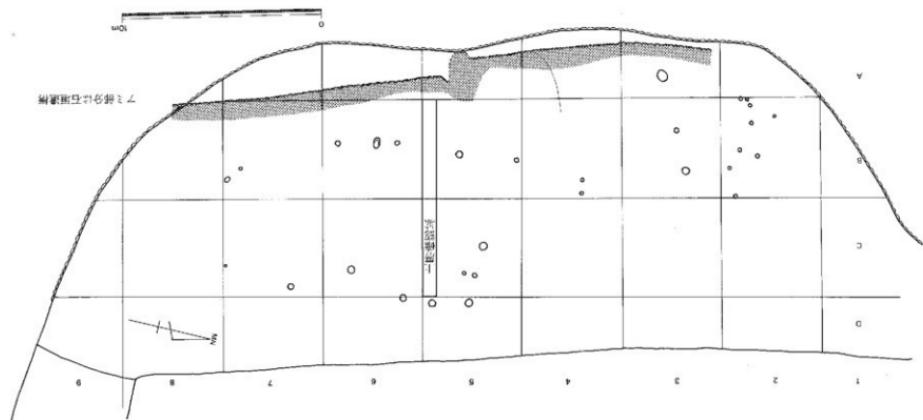
調査グリッドは、ほぼ南北に長軸をとり北から1～9の番号を付け、東西の短軸にA～Dの記号を付し、規模は5m×5mである。調査は表土層の下の褐色土層を除くことから始めたが、この層からは近世の陶磁器片などが出土する攢乱層で耕作土層とも呼ばれるものである。耕作土層を一掃すると全体的に黄褐色や庶黄褐色を呈した土層が現われるが、トレンチ状に掘った土層観察では、版築状に重ねられた状況が明瞭である。層は階段状を呈しているが、上層からは遺物も出土している。遺物は中世の国内産の焼物や、中国輸入陶器やその他の遺物が得られている。C—1・2区では比較的遺物の集中が見られたが、他の区域での集中度は低い。また同じレベルから柱穴も検出されている。深く大きな柱穴からは、まとまった炭化物も得られている。版築状に固められたためか、柱穴を確認する作業は手間どり全部で30個を数えたにすぎず、建物遺構を復原するにはまとまりに欠け不十分である。

今回の調査の大きな発見は石垣遺構の検出である。遺構はほぼ南北に伸び、長さ約27m、幅1m前後である。若干乱れた部分もあるが、ほぼ整然として並べられている。この遺構の外側1m内外の所には水田の擁壁が高さ4.5mの規模で築かれている。地主によれば、昭和37年の水害時に石垣が崩壊して修理したが、この際にも内側の石積には気付かなかったという。

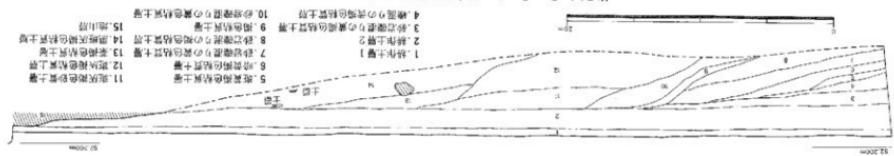
調査の記録措置は、柱穴などの遺構配置図を縮尺1/100、石垣遺構平面図および断面図を作成した。試掘調査時のNo10試掘場で確認された集石遺構は、断面に検出されたこともあり、また保存地域であったため、写真撮影だけにとどめ現状のまま埋め戻した。

柱穴中より得られた炭化物については、京都産業大学理学部に<sup>14</sup>C年代測定を依頼した結果KSU—1225・310±50(年輪年代AD 1510—1590)、KUS—1226・460±40(年輪年代AD 1420)の測定値が得られている。

第6图 27号立交桥下互通匝道纵断面图(1/200)



第5图 B—5·C—5断面图(1/200)



## (2) 土層

本調査区の水田面標高は約52mを計るが、すぐ北側に隣接する茶畠は約59m、その比高差は7mである。試掘調査における茶畠の土層観察では包含層は認められず、表土層下は擾乱を受け、さらに下層には地山層が認られた。この地山層は、全体的に黄色あるいは斑状色を基本とした色調で、やや粘質がかった砂岩質である。

本調査区の表土は約20cmの厚さで全部剥いだが、東側に接する標高約52.3mの表土層の直下は、上の茶畠の試掘場で見られたような、黄色砂質がかった地山層であった。土層観察はB-5とC-5グリッドの東西に、幅1m長さ10mのトレンチを入れて観察した。その結果は、第5回のとおりであるが、現水田面は埋め土によって造成されたことが判る。旧地形は東から西に向って傾斜しているが、平坦面を確保するため、版築工法による造成が階段上に行われていたことが明瞭である。東側では褐色粘質土をベースに重ねているが、次の重なりは灰褐色粘質土を、さらに西側では黄褐色の地山を削って重ねたようになっている。石垣遺構にあたる部分では、版築状の積み重ねは深さ2mに及ぶと思われ、範囲は全体で約400m<sup>2</sup>に至っている。

この状況は、水田造成ではなく、明らかに建物置換群の空間を確保することに目的がおかれていたようである。

## (3) 遺構

川井川内遺跡での遺構は、調査区西側端部に南北に築かれた石垣遺構、調査区内A～D区におけるピット群及び、この遺構を構築するための版築状の土地造成とがあげられる。

これら遺構について出土状況を以下記しておきたい。

まず石垣遺構であるが、当初B-7区掘り下げをおこなっていて、拳大の小礫が、散乱する状況であったため、旧耕作水田石垣の裏込め石と考えていたものであった。しかし石垣内より出土する遺物が、上師器、青磁片等の遺物のみが出土することと、石垣を構築している土層が、何層にも地山土の搬入堆積のくりかえしによって十地の基盤作りがおこなわれ、その版築状に土地造成された面より、柱穴の検出をみており、石垣と柱穴とが関連する遺構であることが考えられるものであった。そのためA-1～8区全体の掘り下げ調査をおこなった。その結果、石垣は南北に全長約27m、幅約1mの一部A-5区で約2.5mのやや石積に亂れを生じるもの、配列された石垣状遺構を検出するにいたった。

石垣の配列は、A-3・4区の間とA-4・5区とでそれぞれ配石に乱れを生じながら、石垣の突き出しをおこない、A-6～8区は、A-7区で一部配石の乱れを見るものの、石垣の印状をほぼ残存させていると考えられる。

次にこれらの特徴をみると、A-3・4・5区には、スレート状の石材を用いる箇所がめだ

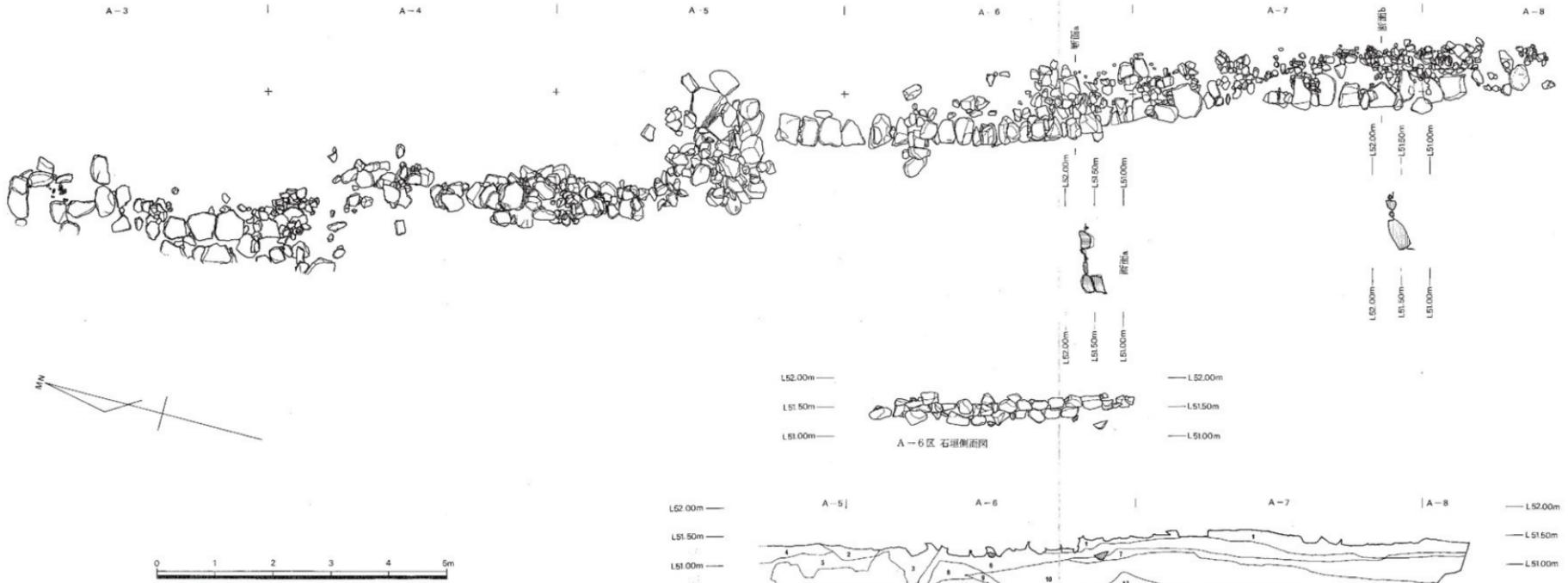
ち、またA—3区には、北側端部には小さな円礎をかためておいた状況を見ている。またA—4・5区は、石垣が線上に配置されず、40m程の角礎の間をうめるように拳大の礎を入れ込んだ状況を見ていた。

A—6・7・8区は、石垣をほぼ線状に配置し、40cm程の角礎と角礎の間に約30cm程のやや小形の角礎を積みあげる状況をみている。そして石垣背後のB—6区中央部からA—8区にかけて、拳大の礎が散乱する形状を示めしている。

この状況をA—6・7区で、断面を部分的に取上げをおこなった状況では、石垣前面に二段の石積を見るものと、A—7区のように、石を積み重ねないで、終わるという築き方をおこない、また石垣背部には、拳大の礎を配す構方法を見ている。これを側面から見ると、自然の礎を積みあげたためか、石積状況は、あまり整った構造をみせていないのが、現状であった。

次に土層について見ると、図に示すように、石垣下の層は、土の搬入による堆積状況を見ていて、かなり複雑な層をなし、攢乱堆積ブロック土層として、1～11のブロック層を図化した。色調を述べると1. 黄茶褐色土、2. 暗灰褐色土、3. 茶褐色土、4. 黄褐色土、5. 茶褐色土、この上は、ブロック3と同じ色調を見ている。6. 暗黄褐色、7. 暗茶褐色土、8. 暗赤褐色土、9. 赤褐色土、10. 暗黄褐色土、11. 暗黄茶褐色、のように、地山の黄褐色、赤褐色粘質土を搬入し、上地造成をおこなったと見られた。

次いで上記のような土層状況から、ピットの検出が非常に困難で、ピットとして図化したものは、覆土に、小豆色を呈するピットのもので、一部ピット内より炭化物、土師器の混入するものを記録した。この中で、東西にB—5～D—5区に一列並ぶものと、B—5、6区北から南へ一列に並ぶピットが、ほぼ直交する形でみられた。またこの両ピットに開まれるC—6区で開元通寶(621年)の出土をみている。その他にB—2、3区において小ピット群の集合を見ている。以上が調査において検出したピットで、建物跡を復原するまでの柱穴群としての状況にはいたらないものであった。(町田)

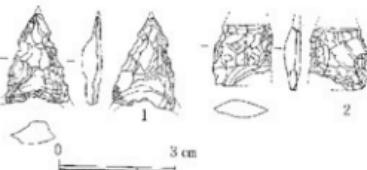


第7図 石垣連続実測図および土層図(1/60)

#### (4) 出土遺物

##### 1. 縄文時代の遺物 (1・2)

石器が2点出土している。1はA-1区III層より出土したもので、灰黒色の黒曜石製である。片面中央にコブ状の剥離しなかった部分を残す。2は表土から出土したもので安山岩製である。抉りの有無は明確ではない。



第8図 縄文時代の石器

##### 2. 中世の遺物

輸入陶磁器である白磁、青磁、青白磁、明染付、緑釉陶器、天目碗、高麗青磁、李朝青磁、国内産の土師質上槽、須恵質土器、瓦器が出土している。他に石鍋片、鉄釘、砥石、銅製碗が出土している。

##### (1) 輸入陶磁器

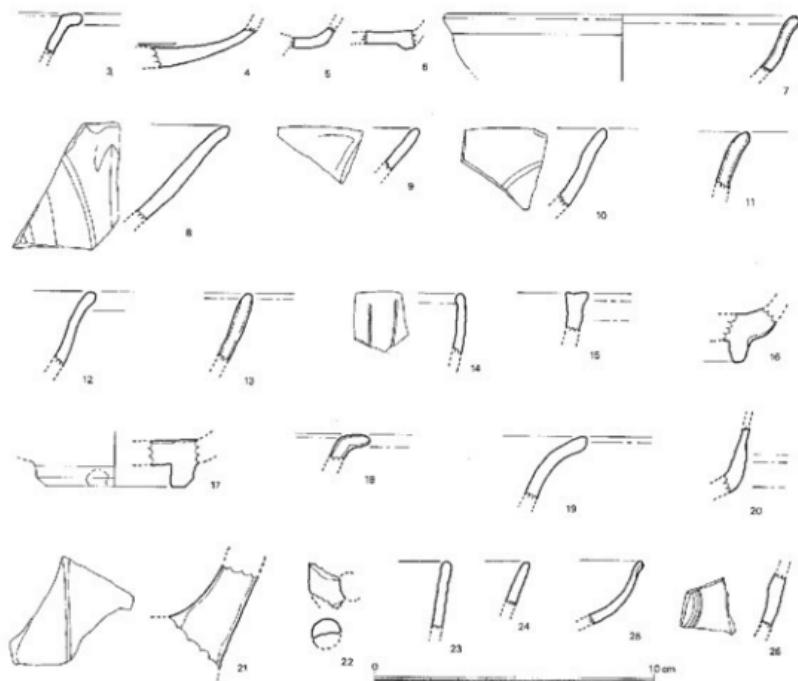
###### 白磁 (3~6)

総点数42点で、大多数が小片である。胎土と釉色により大きく2種類に分類できる。1つは灰色の胎土で、透明釉が掛かり高温で焼成されたもの。もう1つは、ボソボソした白色の胎土に白濁の釉が掛かり、磨滅が激しく低温で焼成されたと思われるものである。3は端反りの皿である。胎土は灰色で、白濁の釉が掛かり固く焼成されている。小野正敏氏分類の皿C群に相当する。4は皿である。外面は回転窯削りが全面に施され、見込には一条の凹線が巡る。胎土は灰白色で透明釉が掛かり固く焼けている。胴部外腹下辺は露胎である。5は多角杯である。胴部上位を面取りし多角形を作っている。胴部下位は回転窯削りが施され露胎である。白色のボソボソした胎土で、白濁の釉が掛かる。同一個体と思われる小片が1点出土している。森田勉氏分類のD群に相当する。6は角杯である。高台を面取りし、五角形に作っている。白色の胎土に白濁の釉が掛かり、固く焼成されている。5と同じく、森田氏分類のD群に相当する。3はC-3区III層、4はB-7区III層、5は表土、6はC-2区III層出土である。

###### 青磁 (7~26)

総点数55点で小片が多い。7は胴部上位でふくらみを持ち、口縁が外反する碗である。灰白色の胎に、淡緑色で光沢の少ない釉が厚く掛かる。上田秀夫氏分類の、D-II類に相当する。D-1区III層出土。8、9は縫入りの蓮弁を、胴部外面に彫刻している碗である。灰白色の胎に淡緑色の釉が掛かる。10は線影で單弁と思われる蓮弁を、胴部外面に彫刻している碗である。灰白色の胎に淡緑色の釉が掛かる。森田勉・横田賢次郎氏分類によれば、8、9はI-5 b類

10はI—5 a類である。8は9トレンチⅠ層、9は表土、10はP—12区出土である。11、12は口縁が外反し、灰白色の胎に、ガラス質で濃緑色の釉が掛かる碗である。11の釉は厚く掛かり、気泡と貫入が入る。上田氏分類のD—III類に相当する。11はD—1区III層、12はC—6区III層出土上。13は石垣A—2から出土した碗である。脛部上位で薄くなり口縁で再びふくらむ淡灰色の胎に、薄緑色の溶けきっていない釉が厚く掛かる。14は細線の線描施文が、胴部外面に彫られた碗である。ゆるやかに内湾して口縁に至る。灰白色の胎に、貫入のはいるガラス質で透明度の高い緑色の釉が掛かる。上田氏分類のB—IV類に相当する。A—6区III層出土。15、16は同一個体と思われる碗である。黄白色の胎に、貫入がはいる黄味を帯びた緑色の釉が掛かる。15は口縁で、面取りが行われている。C—8区III層出土。16は底部で、唇付、高台内面共に施釉されている。A—3区III層出土上。17は高台外面をヘラ削りで面取りした碗底部である。:灰白色の胎に、緑色の釉が厚く掛かる。高台内面、唇付は露胎であり、高台外面には施釉の際の指痕と思われる無釉の部分がある。見込にはヘラで彫った文様があるが、部分的であり構成は明かではない。P—6区出土。18、19は端反りの皿である。18は灰白色の胎に、磨りガラス状の



第9図 輸入陶磁器実測図(1)

濃緑色の釉が厚く掛かる。19は灰白色の胎に、磨りガラス状の薄緑色の釉が掛かる。小野氏分類の白磁皿C群に形態が似る。18は表上、19はD—2区III層出土。20は番炉の胴部と思われる。外面下部に降帶を持つ灰白色の胎に、薄緑の釉が外面に掛かる。C—8区出土。21は盤で、ぶ厚い底部片である。外面には蓮弁文と思われる文様が彫られている。胎上は灰白色で、光沢のある深緑色の釉が厚く掛かる。D—1区III層出土。22は窓の耳に飾る輪の小片である。灰白色的胎に、ガラス質で濃緑色の釉が掛かる。B—7区III層出土。

#### 青白磁 (23~26)

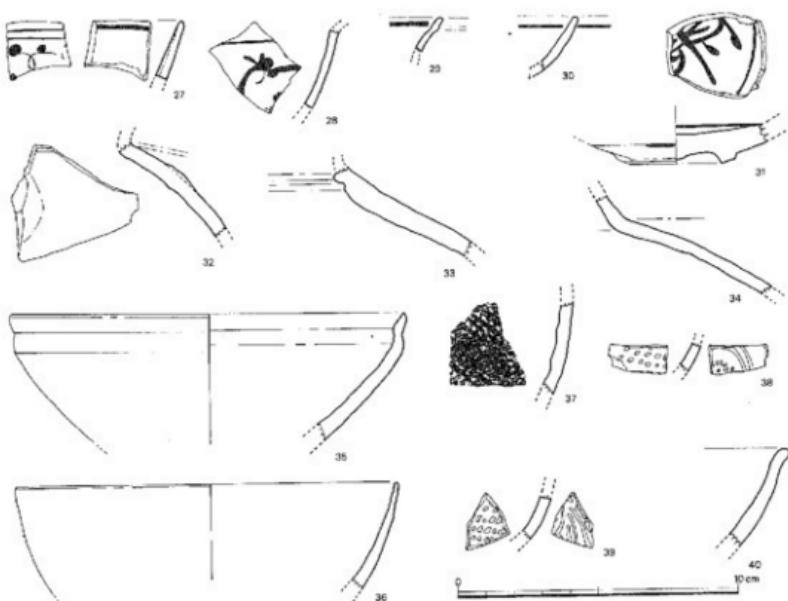
総点数9点である。23~25は碗の口縁である。白色の胎に、青味がかった薄い緑の釉が掛かる。23、24はほぼ直線で口縁に至る。25はふくらみを持つ胴で口縁は外反する。26は滑形が明確でない。胴部外面に櫛描状文様を描き、灰白色の胎には、貫入がはいる青味がかった薄い緑の釉が掛かる。23はC—8区III層、24はB—7区III層、25はB—8区III層、26はC—5区III層出土。

#### 明染付 (27~30)

総点数8点である。27・28は碗である。27は口唇部が露胎で口禿げ状を呈する。内面口縁部に1条の直線が巡り、外面は2条の櫛線の下に唐草文が描かれる。灰白色の胎に青味がかった透明釉が掛かる。内面の釉は厚い。小野氏分類のC群に相当しよう。28は口縁部が外反し、小野氏分類のB群に相当する。外面口縁部には雷文、團線を挟み唐草文が描かれる、白濁の胎に、青味がかった磨りガラス状の透明釉が掛かる。27・28共にB—7区III層出土である。29、30、31は皿である。29は胴部上位で外反し、口縁下に腰帶をつくり口唇に至る。内面口縁部に1条の團線が巡る。灰白色の胎に、透明釉が掛かる。小野氏分類のB群に相当する。B—4区III層出土。30は口縁部の内、外面に1条の團線が巡る。白濁の胎に、貫入がはいる磨りガラス状の釉が掛かる。6トレンチI層出土。31は底部で基筒底である。外面胴部下半に1条の團線、見込に1条の櫛線が巡る。また、見込には銘款と思われる文様が描かれる。胎は白濁で、貫入がはいる透明釉が全面に掛けられ、外面高台では垂れている。焼成の際に下に敷いた灰痕が、置付と高台内面に付く。9トレンチII層出土。30・31共に小野氏分類のC群に相当する。

#### 綠釉陶器 (32~34)

総点数24点である。32・33・34は壺の小片である。32は肩の部分であり、耳の痕が僅かに残る。胎は灰色で、ガラス質で貫入がはいる黄緑色の釉が、薄く全面に掛かる。C—2区III層出土。33は肩の上部である。内面の首との境には段を有する。胎は灰白色を呈し、外面には綠釉が掛かる。綠釉は剥落しており僅かに残る。D—1区III層出土。34は肩から首にかけての小片。胎は灰白色で、外面は全面、内面は首部まで綠釉が掛かる。外面の釉は煮えて波状を呈する。



第10図 輸入陶磁器実測図(2)

D—1区III層出土。

#### 他の中国産陶磁器 (35~37)

30点出土した。小片で図示しなかったが、灰色の胎に、艶のない黒色の釉が掛かる陶器。白色の柔い胎で、内面に緑黄色の釉が掛かる破器も出土している。35は天目碗である。灰色の胎に、黒と茶色の釉が掛かる。表土から出土した。天目碗はこの他に、別個体の小片が出土している。36は薄く仕上げた碗である。胎は白濁で、艶のない赤紫の釉が掛かる。B—3区III層出土。37は外面に格子状の叩き目が残る。胎はあざき色を挟み、内外面は黒灰色を呈する。焼き締めてある。器種は明確でない。D—1区III層出土。

#### 朝鮮産陶磁器 (38~40)

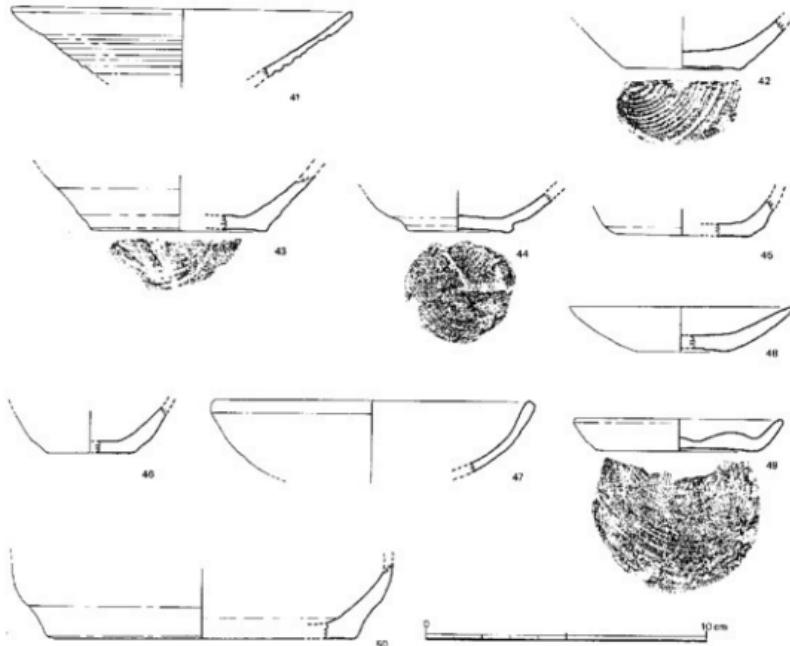
總点数3点である。中国産の陶磁器と比べると、点数がはるかに少ない。38、39は高麗青磁碗の小片である。灰色の胎に、外面は白色と黒色の象嵌が施される。内面は列点状の白色の象嵌である。同一個体と思われる。P—4区出土。40は李朝青磁碗である。外反する口縁で、灰色

の胎土に、艶のない灰白色の釉が掛かる。C—6区III層出土。

## (2) 国内産の遺物

### 土師質土器 (41~50)

総点数 107点であるが、磨滅が激しく成形、調整が明瞭に残るものは少ない。41~50は碗である。41は外面に沈線がはいり、ラッパ状に開く。胎は赤褐色で、薄く仕上げる。A—2区石垣出土。42は回転糸切り痕の残る、白褐色の底部片である。ロクロ回転は時計回り。A—2区石垣出土。43は回転糸切り痕の残る、赤褐色の底部である。ロクロ回転は時計回り。B—7区石垣出土。44は回転糸切り痕の残る、高台様の底部である。ロクロ回転は時計回り。ていねいな作りで薄く仕上げる。内外面共に吸炭し黒味がかかっている。表土からの出土。45は底部片であ



第11図 国内産の中世遺物実測図(1)

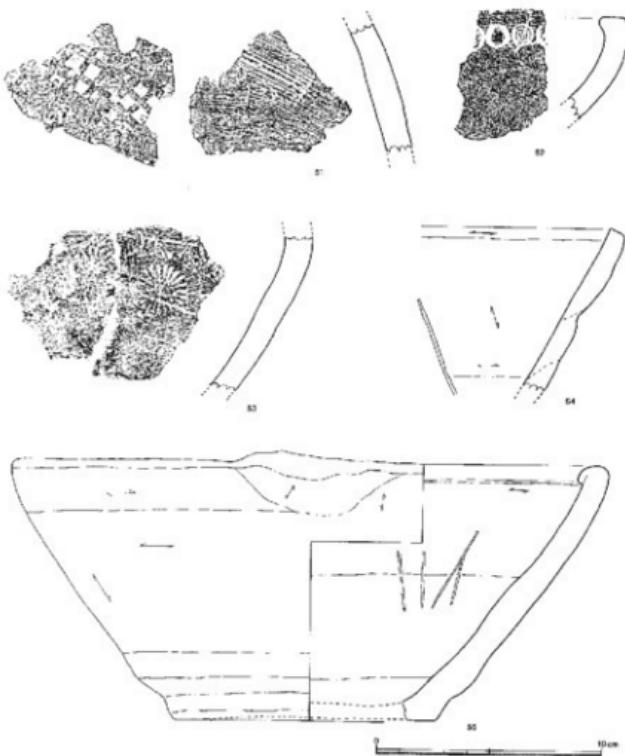
る。色調は赤褐色を呈する。磨滅が激しく成形、調整方法は明確でない。表土より出土。46は小碗底部である。底部には回転糸切り痕を僅かに残すが、ロクロの回転方向は明確でない。色調は赤褐色。A-5区III層出土。47~49は皿である。47は緩かに内湾しながら口縁に至る脇部である。胎土に砂粒を多く含み、白褐色である。石垣出土。48は白褐色の小皿である。胎土に砂粒を多く含む。磨滅が激しく、成形、調整方法は明確でない。D-1区III層出土。49はB-7区石垣より出土した平たい皿である。色調は赤褐色で、底部には回転糸切り痕を残す。ロクロの回転は時計回り。50はB-7区石垣より出土した盤である。赤褐色で、胎土に砂粒を多く含む。残存部の観察では、脇部最上位の厚さが0.4cmと薄く、あまり上まで続かないと思われる。

#### 須恵質土器・瓦質土器(51~55)

須恵質土器は総点数5点、瓦質土器は総点数47点。51は黒灰色で硬く焼き結まっており、須恵質である。脇の脇部上位と思われる。外面には一辺0.4cmの四角形4つを基本にしたスタンプが押され、内面には櫛状工具によるなで痕が残る。B-2区III層出土。52~55は瓦質の土器である。52は青灰色で焼きがあまい。口唇部は面取りされて平になっており、外面口縁部には竹管文が施される。胎土に黒色粒子を多く含む。火舟、香炉の破片であろう。表土より出土した。53も火舟、香炉の破片であろう。脇部外面は花文のスタンプが秩序なく押されている。成形、調整方法は磨滅のため不明。色調は、外面は茶褐色で部分的に吸炭の黒変が見られる。内面は灰白色。D-1区III層出土。54は福り鉢である。断面に粘土粗痕を残しており、粘土粗積み上げ後水びき成形をしたものである。外面は粘土紐の接合部を横なでし、内面は下部に横なでが上部に斜め方向のなでが観察できる。口唇部は他の部位よりもていねいになじてなめらかにしている。胎土に砂粒を多く含み、しかも磨滅が激しいために、溝目は1条しか残らない。色調は白褐色である。中央トレンチIII層出土。55は片口の福り鉢である。脇部はほぼ直線で、口縁部は緩く内湾する。口縁部内面には粘土の折り返しがあり段を作る。外面は、脇部上位で横方向のなで、片口部で縱方向のなで、中位で横方向のなでと縱方向のなで、内面は、上位で横方向のなでが見られる。54と同じく磨滅が激しいが、内面中位に溝目が4条残る。胎土に砂粒を含み、白褐色である。B-7区III層出土。

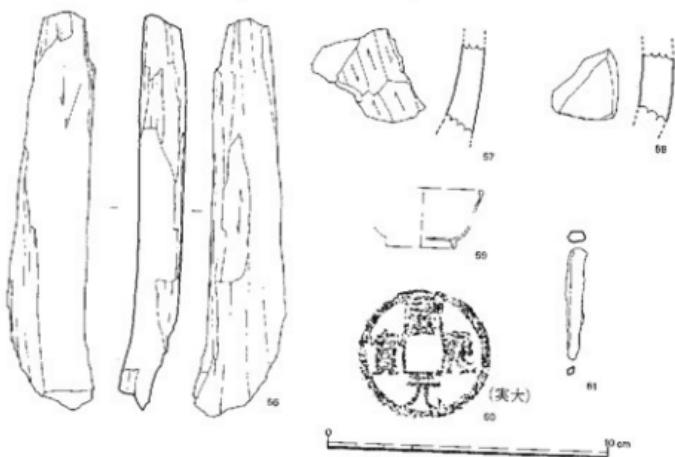
#### その他の遺物(56~60)

56は粘板岩を利用した砥石である。全面が削落している片側面を除き、3面に使用面が残る。最も使用面が残る面の高低差は0.5cmあり、反っている。度重なる使用が考えられる。A-2区石垣出土。57、58は石鍋片である。共に外面は、吸炭でまっ黒である。57は外面に左上から右下にかけて成形の際の削り痕が、内面には横方向の使用の際に付いたと思われる擦痕が残る。C-6区III層出土である。58は成形痕、使川痕を確認できなかった。表土より出土。59は銅製



第12図 国内産の中世遺物実測図(2)

の小碗である。薄く仕上げている。内湾し肥厚するII縁部の小片も同地点から出土しているが土圧により変形している。縁青が全体を覆っている。仏具であろう。D—2区III層出土。60は唐621年に初鉄の開元通宝である。経14.2mm、外縁の厚さ1.25mmを測る。I—1区II層出土。県内での調査出土例は、松浦市櫻井田遺跡がある。61は断面方向形の鉄釘である。錆が全体を覆っている。



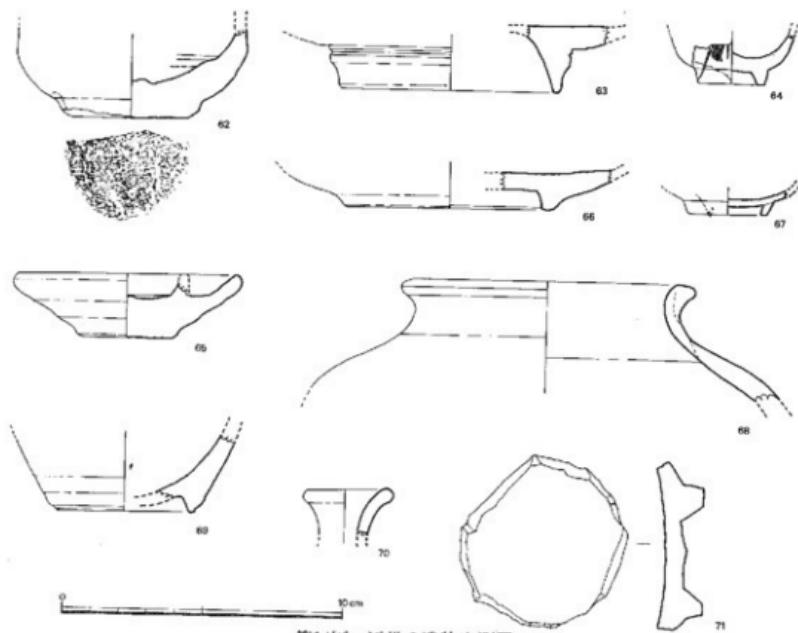
第13図 その他の中世遺物実測図

### 3 近世の遺物

総点数 290点である。陶器、磁器、円盤形陶磁製品が出土している。

#### 陶磁器 (62~71)

62は陶器碗の底部である。誰な作りで、胸部内外面には荒い水びき痕を残す。切り離し後に底部は調整されておらず、回転糸切り痕を残す。ロクロの回転は時計回り。ざっくりした黄白色の胎に、貫入の多い白濁の釉が、底部外面を除き掛かる。外面底部下端には、施釉の際の指痕が残る。唐津系であろう。表土から出土。63は削り出しの高い高台を持つ陶器碗の底部である。削りは胸部下位に及ぶ。胸部下位から高台内面まで露胎である。胸部内面には茶褐色の釉が掛かり、見込のまわりの釉は剥き取っている。また、見込には重ね焼きの痕が残る。胎土は灰褐色を呈し緻密である。表土から出土。64は白磁の猪口である。白色の胎に鉄絵が描かれ、白濁の釉が厚く掛かる。高台内外面は露胎である。絵柄は明確ではないが、同一と思われるものが2対描かれている。A-5区III層出土。65は赤色の胎に鉄釉が掛かる灯明皿である。皿部



第14図 近世の遺物実測図

底面は回転糸切り痕が僅かに残る。受け部は貼り付け。胴部外面及び底面は露胎である。A—5 区Ⅲ層出土。66は染付皿底部である。胎は白色で、貫入と気泡がはいる薄緑がかった透明釉が疊付を除き掛かる。見込には一条の圓線が巡り、文様が描かれる。疊付には砂が付着する。表土出土。67は白磁の猪口である。白色の胎に、疊付と高台内面を除き黄味がかった白濁の釉が掛かる。高台は貼り付けである。C—5区Ⅲ層出土。68は壺の口縁部である。外面は黒くいぶされ、釉は掛からない。粘土紐積み上げ後水びき成形をしたものである。口縁は折り込みで、内面に叩き痕を残す。肩には耳を貼り付けた痕が残る。表土からの出土。69は白磁壺の底部である。灰白色の胎に、薄く黄味がかった透明釉が、内面と疊付を除き掛けられる。外面の釉瘤には気泡が多く見られる。表土からの出土である。70は長頸壺の口縁部である。ザックリとした白褐色の胎に、緑と白がまだらに混ざる貫入のはいったガラス質の釉が掛かる。口唇部は斜めに仕上がる。C—7 区Ⅲ層出土。71は円盤状陶磁製品である。径 6.6cm、重さ 56.9g を測る。灰白色の胎に、貫入がはいる透明釉が掛かった碗底部を利用している。打ち欠きは見込を上に行っている。

## 当遺跡出土の中世の土器について

当遺跡からは中世の陶磁器が362点出土している。そのうち最も多いのが土師質土器である。次に青磁、瓦質土器、白磁…と続く。土師質土器が輸入陶磁器と比べ量的に多いのは、土師質土器が当時手軽に使われ、しかも破損しやすい土器であることからも理解できる。その土師質土器であるが、底部片で切り離しが解るものが4点出土している。4点とも時計回りのロクロで回転糸切りを行っていることが特徴としてあげられる。

次に国内産土器と輸入陶磁器の数は、輸入陶磁器の方が国内産の土器を超えていることがあげられる。大陸に近いという地の利が、輸入陶磁器の数を多くしたものと思われる。

その輸入陶磁器であるが、数的に最も多いのが15世紀から16世紀にかけての遺物である。

(川 煙)

註1 小野正敏「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会

1982

2 森田勉「14~16世紀の白磁の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会 1982

3 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会

1982

4 森田勉・横田賛次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』

1978

5 「櫻松田遺跡」『長崎県文化財調査報告書第76集』長崎県教育委員会・松浦市教育委員会 1985

種類	点数	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	110	120
白 磁	42												
青 白 磁	55												
青 白 磁 染付	9												
青 白 磁 染付	8												
緑釉陶器	24												
緑釉陶器 その他の中 國製陶器	30												
緑釉陶器 その他の中 國製陶器	3												
土師質土器	107												
土師質土器	5												
瓦質土器	47												

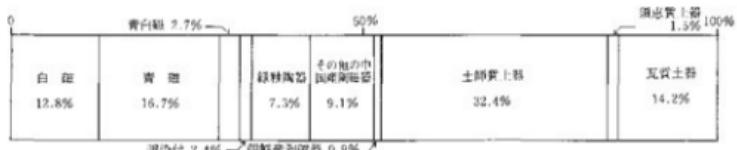


表2 出土した中世の土器の総点数と比率

## (5) 法音寺郷所在の青温石製石塔について

今回の調査では、中世期における建物跡と確信してよい遺構の検出を見た訳であるが、その周辺に位置している同時期の石塔は、これらの遺構と関連づけて考える上で重要である。

長崎県下では、北は北松浦郡の一部と、東西彼杵郡の大村湾沿岸一帯、および西は五島列島の一部に至るまで、中世期の主な石造物である五輪塔、宝篋印塔の中に、西彼杵半島を主産地とする通称青温石と呼ばれる滑石を利用した、特定の材料を使った現象が見られる。では本論の前に岩手特殊な石材である「滑石」についてふれてみよう。

滑石を産する西彼杵半島は、最も古期に属する「西彼杵変成岩」（または長崎変成岩）によって構成されている。また半島の広い地域で蛇紋岩が見られるが、この岩体の周縁部に近づくと滑石の生成が見られ、滑石の外には陽起石、緑泥岩、絢雲母、曹長石などが規則正しく帶状に発達し、ついに母岩の結晶片岩に移化するという。そしてこの鉱床は「西彼杵型滑石鉱床」と呼ばれている。この鉱床は古くから色々な生産用具として利用された歴史をもつ。

特に石鍋の利用は古くから知られ、製作址の調査に关心がもたれてきた。昭和54年には、大瀬戸町内における石鍋製作址遺跡の分布調査が実施され、その後の半島全域にわたる県教育委員会による分布調査では約70箇所以上の製作址が確認されている。特に大瀬戸町瀬戸羽出郷字ドンクウ岩のホゲット遺跡はその規模が大きいことで知られ、国の史跡指定を受けている。

では年代についてはどうであろうか。全國の遺跡から出土している石鍋の時期は大体において、平安時代末から中世とされてきた。ホゲット遺跡の木炭を使った年代測定では  $915 \pm 170$  BP y と  $970 \pm 100$  BP y の年代値が得られ、製作活動年代の目安となっている。

古い文献では京都仁和寺旧蔵文書「力丸山農家財譲状」弘長元年（1261）東大寺文書「筑前国船越庄朱追勘文」天承元年（1131）が知られ「頬象雜要抄卷四」久安2年（1146）「厨事類記」「武家調味故実」天文4年（1535）などに記載を認めることができて山田町時代まで確實に使用されていたことが窺われ、当時の生産と流通を知る上でも重要である。

### 法音寺郷所在の文安祈願塔（第15図・図版13）

法音寺郷所在の石造物については、すでに大石一久氏、溝上英次氏、濱井鶴郎氏の見解があり異論をはさむ余地はない。しかしここでは調査中に判明した事実について述べることにする。現在国道34号線が大きく曲る大楠小学校手前に大溝神社が位置するが、石塔は道路を挟んで東側の密林となっている道路の片隅に祀られている。だが、この塔は元からここにあったものではないことが、土地の人の話を聞くうちに判明したのである。それによると、原位置は調査区の南側約50m余り離れた傾斜地の水田の裏面が崩壊した際に、偶然出土したものだと言われる。その後は天溝神社に近い道路端に移したが、さらに現在地に移して今日に至っているという。石塔は宝篋印塔で、数基の基礎部分が寄せ集められている状況である。石質はすべて通称青温石製と呼ばれるもので、基礎の部分の正面には一族の結束と繁栄を願った銘文を刻まれ、文

安<sup>一</sup>丁卯二月（1447）の年号が入る。右側面には28名の神門が、左側面には15名の尊尼と童士1名が刻まれている。

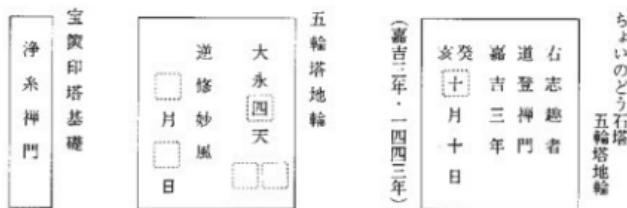


第15図 法音寺郷所在の青温石製文安の祈願塔拓影(約1/4)

### ちょいのどうの石塔 (図版14)

調査地の北側、四郎丸の国道に隣接した所に小高いこんもりと木の生い繁った一角があり字「ちょいのどう」と呼ばれている。頂部は平坦にならされ、ここにも青温石製の五輪塔や宝篋印塔が、後世に作られた基壇の上に寄せ集めの状態で並べられている。各部分は五輪塔のものが多く、この中の五輪塔地輪には嘉吉3年(1443)や大永4年(1524)の紀年銘があり、中には逆修妙林禪尼の銘も見える。地域の人達の話によると、この一帯は古くから勝手に入ってはいけない禁忌の地でもあったといわれる。銘に禪門、禪尼があることから文安祈願塔とも関連づけて考えると、近接地に寺院の立地が考えられるのも不自然ではない。

満井氏によれば、「文安の祈願塔者達は古い名主から独立した四十一家の小名主達が、地域的結合を行い何かを契機にこの祈願塔を作ったのではないか」とされている。そして大正2年(1913)に吹き荒れた大村純忠のキリスト教改宗による、領内寺社の破壊が石造物にまで及んだことは、文安祈願塔の出土状況からしてこの時期に破却され埋められたことも考えられる。



### その他の町内所在の石塔 (図版15・16)

現在町内には点々と石塔の所在が認められている。嬉野町寄りの東坂本郷の国道端にも五輪塔地輪が1箇認められる。さらに藏本郷大門の安全寺跡に宝篋印塔と五輪塔が所在し、前者には応永8年(1401年)の年号が刻まれている。また本来安全寺にあったとされる宝篋印塔5基、五輪塔4基が町教育委員会敷地内に移されているが(図版15)前者には文龜2年(1502)享禄2年(1529)の年号が見られる。千錦地区では、千錦宿郷の牛の頭に石塔があり、江の串には江串三郎入道塚と呼ばれる五輪塔各部が多く存し、宝篋印塔も基礎が1基見られる。また時代は不明であるが清心寺跡と伝えられている富永氏宅裏の水田の一角にも五輪塔地輪が、さらに20m離



れた用水路堤にも五輪塔がある。里郷墓場の楠木氏宅裏の崖の一角にも五輪塔数基と宝鏡印塔基礎1基が所在する。これらの石塔のはほとんどは青温石製であるが、凝灰岩製の石塔も若干含まれる。ただ完全な形での石塔はほとんど見られず、寄せ集めたものを適当に組み合せたか、各部分だけというのが現状である。

- 註1. 鈴田泰彦『大瀬戸町石錫製作所遺跡』大瀬戸町文化財調査報告書第1集 1980
2. 古い文献については下川達郎「滑石製石錫山土地名表」(九州・沖縄)『九州文化史研究紀要 第29号』に掲った。
3. 大石一久「大村地方における中世期石造美術について」(その一)『大村史蹟』27号 1984
4. 満井鉢郎・満上英次「長崎県中世史の諸問題」『大村高紀要』2号 1983
5. 註4と同じ。

#### IV おわりに

川井川内遺跡の立地は、背後に峻険な虚空蔵山巒を控え、平野部を見下ろす奥まったところながら大村湾も一望できるという、地形的にも祭祀的な要素の強いことがあげられる。

今回の調査では、中世の遺構、遺物の出土という観点から、土地に伝えられている尼寺の存在と、何よりも法音寺という地名が示すとおり、寺院の存在が考えられた。しかし古文献の中にも寺院の存在を示す手がかりは求められなかった。ただ大村藩『郷村記』彼杵村の項には、現在も青温石製石塔が残る大御堂安全寺の存在が知れるだけである。しかし郷村記の中には「旧記ありといえども今は知れず」として、大安寺、報恩寺、永林坊、妙音寺、治法寺、福伝庵、尊修寺、池勝寺、千寿寺、高林坊、大門坊の11寺があげられているが、ここにも法音寺の名前はない。また千綿郷清心には清心寺跡が伝えられ、ここには石塔群が残り、少なくとも江戸時代以前には彼杵周辺には多くの寺院が存在していたことが窺われる。同様のことは大村市周辺、時に郡川流域に、郡七山、あるいは、久寿2年(1155)欠上山唐泉寺の住持春輝が宗論を呼びかけ14寺が集まつたといわれるとおり多くの中世寺院が建ち、今日では存在しないものの地名として残っているものも多く、石塔群も見られる。

周辺に関する寺院の状況は以上であるが、試掘調査および本調査で判明したことは、遺物が広い範囲で採集され彼杵川支流の北側では緩い階段の水田に設定した試掘場から、集石遺構が検出され、遺跡としての拡張が認められた。舌状に突き出た調査区は土を積み重ねた版築

状に造成されており、先端は石垣遺構が残っていた。この遺構の外側にはさらに後世の水田が1m～2mにわたり拡張され、現水田の石垣が積まれている。古い石垣の内側では柱穴も認められ、かつ遺物も出土しており、確実に建物の存在が認められるのである。

遺物は大きく中国産陶磁器、朝鮮産陶磁器、国内産の土器の3つに分けられる。調査方法が色々な要素で満足されるものでもなかつたが、中国産の輸入陶磁器の占める割合が多いのが特徴としてあげられる。時期的には15世紀から16世紀にかけてであり、このことは、放射性炭素による年代測定結果においても妥当性をもつものである。また文安4年(1447)の祈願塔や在地名主の存在も裏付けされるものである。そしてこの遺構の終焉は、大村純忠によるキリスト教改宗と、これに連動する創内寺社の破却の天正2年(1574)頃ではないだろうか。柱穴に残存している良好な木炭片や、文安祈願塔が、今回の調査区に近接した水田の横の中から破壊され埋められた状況で出土したという事実や、第16図の大村地方の中世寺院もこの時期に消滅していることを考えると、一層その感を深くするものである。しかしながら、この遺構を中心とする遺跡の性格が寺院であったという確証は得られなかつたが、輸入陶磁器の出土や造成された建物遺構を考えると在地の名主あるいは寺院が考えられるが、そんな中で周辺の青温石製石塔の存在は、寺院の一隅に祀られたという可能性が妥当といえるのではないだろうか。

また石鍋と同じく滑石で造られた石造物は、限られた期間に限られた地域で普及しており、その量的な多さから当時の運搬手段や石工の存在などめきにしては考えられず、中世における特定地域の集団のつながりを想起させるものがあるのではないだろうか。(安楽)



第16図 郡川周辺および東彼杵周辺の中世寺院と城跡

## ——付——

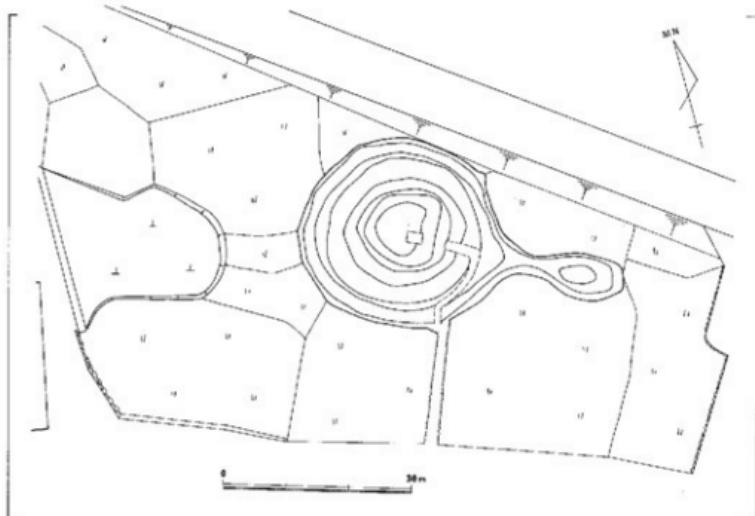
### 彼杵川流域の古墳

彼杵川の流域には、いくつかの古墳の存在が知られており、昭和51年夏に県文化課が実施した「長崎県埋蔵文化財発掘技術者講習会」での実習の対象として、墳丘の測量をしたものもあるので、概略を記しておきたい。また、昭和58年度に行われた、古墳群周辺の田畠整備事業に伴って出土した遺物があるので、併せて報告することとする。

### ひさご塚古墳（第17・18図 図版18）

本古墳は、彼杵宿郷字古金屋道上にある前方後円墳である。彼杵川によって形成された平地の南端部に位置し、周囲は水田となっている。

墳丘は、全長51.8m、後円部の直徑29.5m、前方部の幅は7.1mで、主軸をN-62°-Wに向いている。高さは、後円部で6.2m、前方部で2.6mあり、後円部の大きさに比較して前方部がひどく小さく、高さも低い。全体的にもう少し大きく、前方部も高かったものと思われるが、永年の水田耕作などによって削り取られ、現在のようになつたものであろう。後円部の形状を見ると、途中に平坦な面があることから、築成は二段になつていたものと思われる。埴輪は認められていないが、葺石と思われる拳大から人頭大の石が、部分的に残存する。周濠は残っておらず、周囲の水田の状況からも、それらしいものの存在は窺えない。



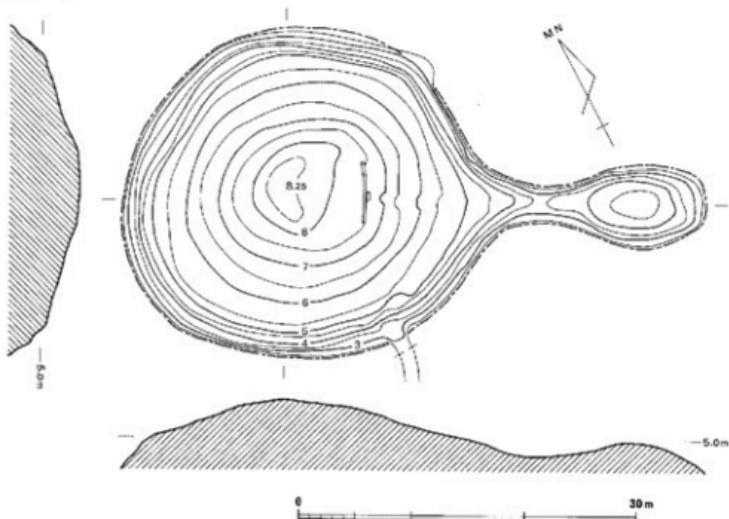
第17図 ひさご塚古墳周辺地形図

内部主体は不明であるが、現在、後円部のはば中央と思われる付近に祭壇があり、その基壇部に扁平な板石が使用されていることから、これらの板石を用いて埋葬主体部を構築していたものと考えられる。板石はさほど大きくなく、数量も多いところから、箱式石棺よりも竪穴式の石室であった可能性が強い。

この古墳には、二度にわたって主体部が開かれたという話しが残っている。最初は、明治10年頃に盗掘を受けたというもので、その内容については定かではない。その後、明治31年頃、古墳のそばを通る鉄道が完成したが、この工事に伴う土取り作業中に主体部が開けられたという。この時は、鉄刀一振りと、数量は明確ではないが多数の鐵鏃が出上したといわれている。その他、玉類の出土についても伝えられているが、種類・数量ともに現在では不明である。本古墳は、5世紀代のものと思われるが、県内の数少ない代表的な前方後円墳ということで、昭和25年4月10日付けで、長崎県の指定史跡となっている。

ひさご塚古墳の西側に、現在は墓地となっているが、周辺の水田より一段高くなった場所がある。フレオニ塚古墳と呼んでいるが、平面形からすると、主軸をほぼ東西に向ける前方後円墳であったものと思われる、現在の長さは約25m、後円部の直径は15mほどである。

これらのほかにも、彼杵川の南岸に横穴式石室を埋葬主体とする古墳群がある。昭和58年秋に実施した分布調査で、これらの古墳群から出土したと思われる遺物があるので、以下に紹介しておきたい。



第18図 ひさご塚古墳墳丘実測図

### 彼杵川古墳群出土の遺物 (第19図 図版19)

全て破片となっての出土で、ほとんどが須恵器である。図に示したもの以外に、直経50cm以上になると思われる甕の破片があったが、破片数が少なく、図でも復原できなかった。

#### 环 (第19図 1~7)

小破片から復原したものばかりである。1・2は立ちあがり部分が厚く、先端はやや尖がらせつつ直立ぎみに伸びる。内面にかすかに棱が付く。1・2とも色調は灰色を呈する。胎土は1には5mmほどの小砂粒が含まれるが、2は精良なものを使っている。1の焼成はややあまいが、2は堅く焼けている。3 精良な胎土で、堅く焼けており、内外面とも濃い灰色で、わずかにあざき色を呈する。立ちあがりと、受部の先端はやや丸くおさめている。4 灰色で、胎土・焼成ともに良好である。受部先端は丸くおさめるが、立ちあがりの先端は薄く鋭く作っている。受部上面に、蓋の先端部が焼成時の痕跡として残っている。5 内外面とも灰色であるが、断面部はうすいあざき色。胎土・焼成ともに良好で堅く焼けている。立ちあがりと受部の先端は、それぞれ鋭く作り出している。6 薄手の作りである。内外面とも灰色を呈し、胎土には石英などの小砂粒を含む。焼成は良い。7 上部にうすいあざき色の部分もあるが、全体として濃い灰色を呈する。受部先端は丸くおさめ、立ちあがりは薄く先端を尖がらせている。胎土・焼成ともに良好である。以上の环の法量は、立ちあがりの直径で9.7cmから11.3cm、受部の直径12.4cmから13.5cmの間にはさまる。

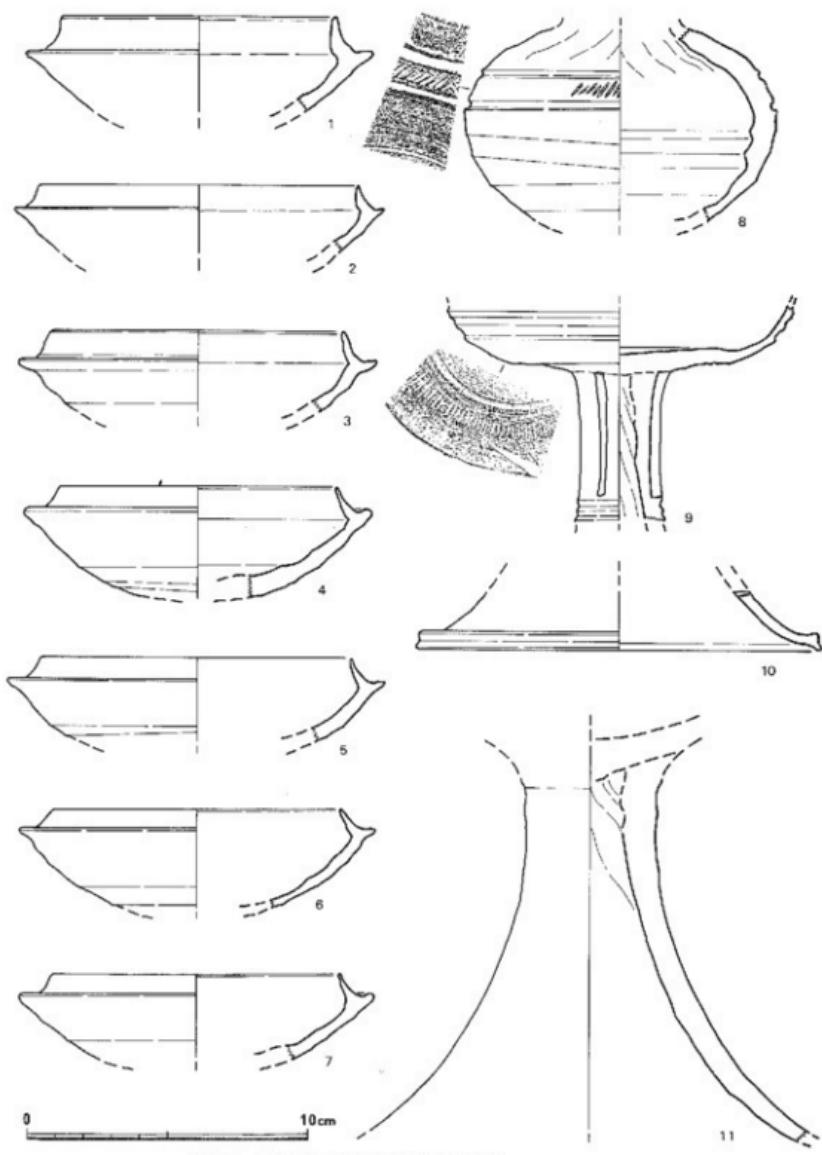
#### 甕 (第19図 8)

頸部以上と底部がなく、胴体部分も半分以上を欠いている。胴経11.2cmで、ややつぶれた球形になるものである。頸部から肩部にかけての内外面に、水引き成形時のシボリ痕が残る。胴上部に、1.1cm~1.4cmほどの間隔をおいて2本の沈線を回らせ、その間を左下がりの列点文で埋めている。胴体下部は、わりと難い感じにヘラ削りで処理している。内面には、水引き成形時の痕跡が明瞭に残っている。肩部と内面底部付近の一部に、黄褐色の自然釉がわずかにかかっている。内外面ともに濃い灰色を呈する。胎土・焼成ともに良好で堅い。

#### 高环 (第19図 9・10・11)

9は、無蓋の高环であるが脚下半部と环の上部を欠いている。环部は薄く、外面底部に列点文を回らしている。シボリ痕を残す細めの脚には、三方からすかしを切り込むが、いずれも内側まで貫通せず、形だけとなっている。内外面ともに濃い灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。10 ゆっくりと伸びた脚先端部を下方に曲げ、細めに丸くおさめている。濃い灰色を呈し、胎土はやや砂粒が多い。焼成は良い。11 これのみが土師器である。大形で、脚端部の直径は15cmをこえ、脚の高さは13cm以上になる。ゆったりと開く脚で、すかし孔はない。内部には、ロクロによる水引き痕が明瞭に残っており、上部にはシボリの痕跡が認められる。内外面ともに淡い茶色を呈している。胎土には、わずかに小砂粒を含む。焼成は良い。

以上の遺物は、环の形態などからして、6世紀後半期のものと考えられる。(藤田)



第19図 彼杵川古墳群出土の遺物(1/2)

図 版



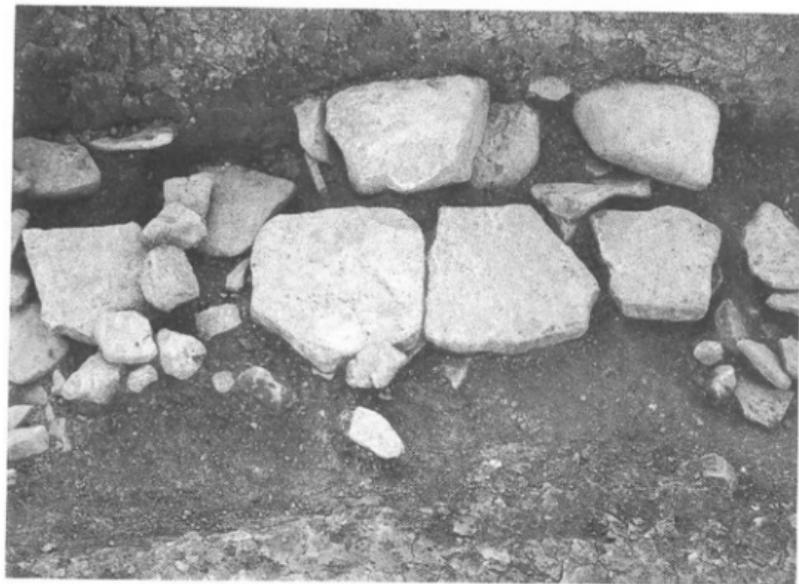
大村湾を望む



遺跡遠景



石垣遗構全景



石垣遺構部分



柱穴遺構

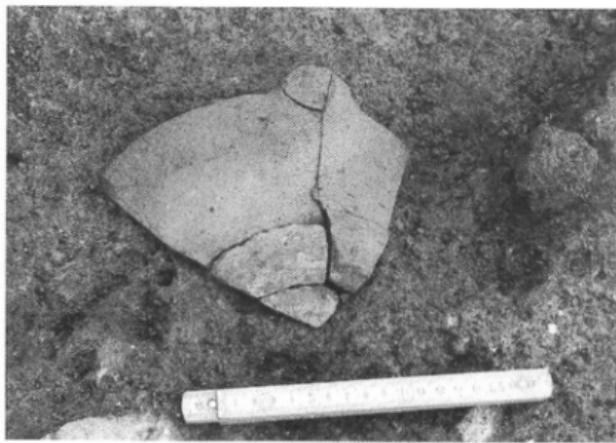


試掘調査時の遺構

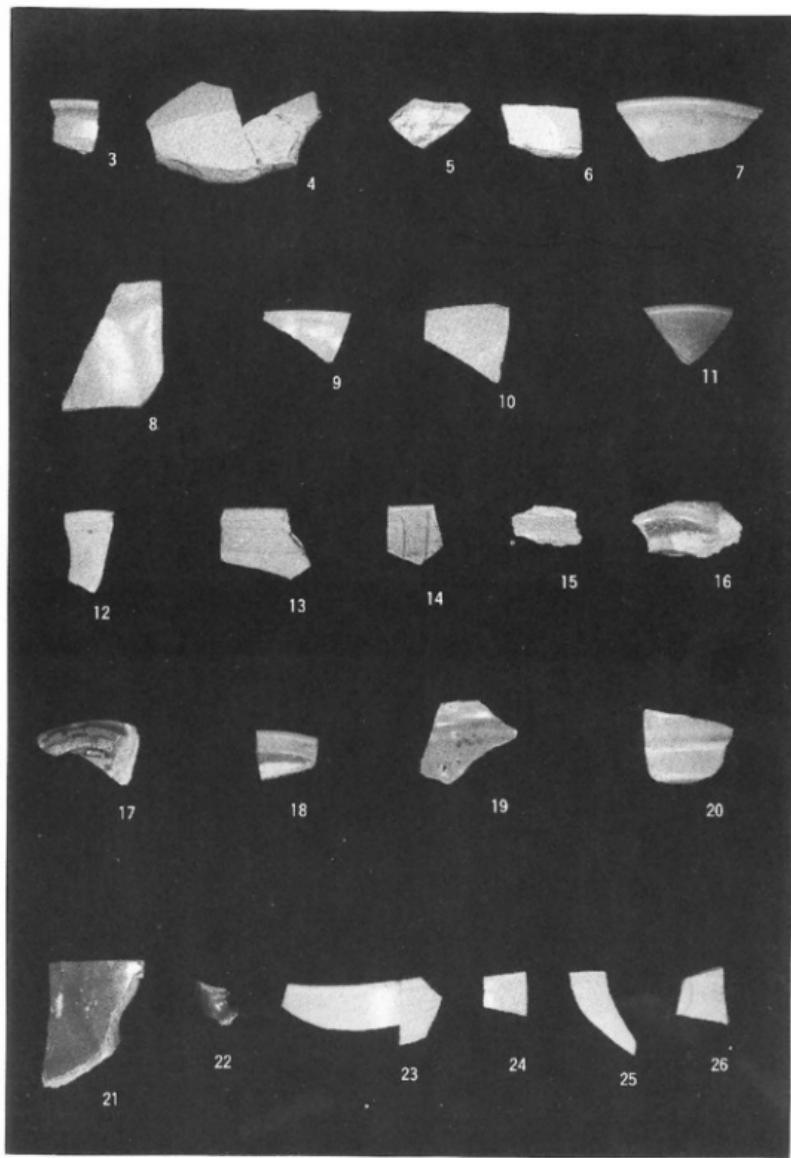
集石遺構



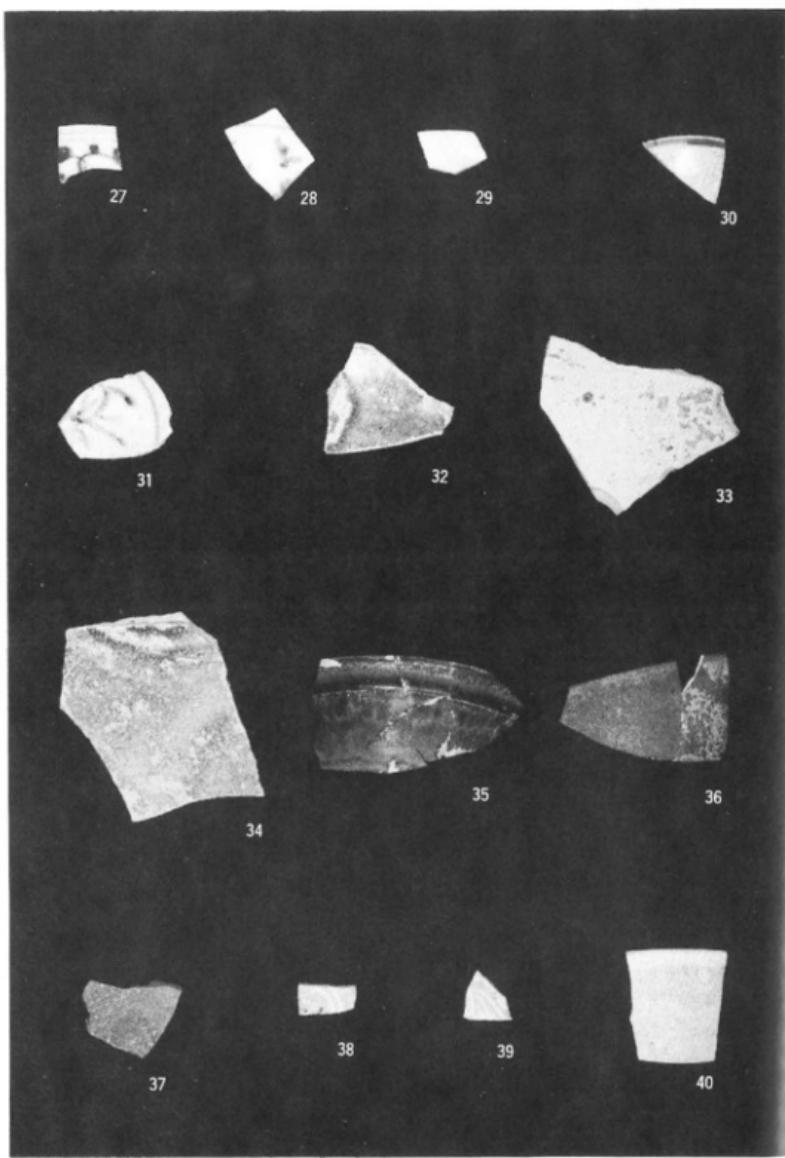
土層および調査風景



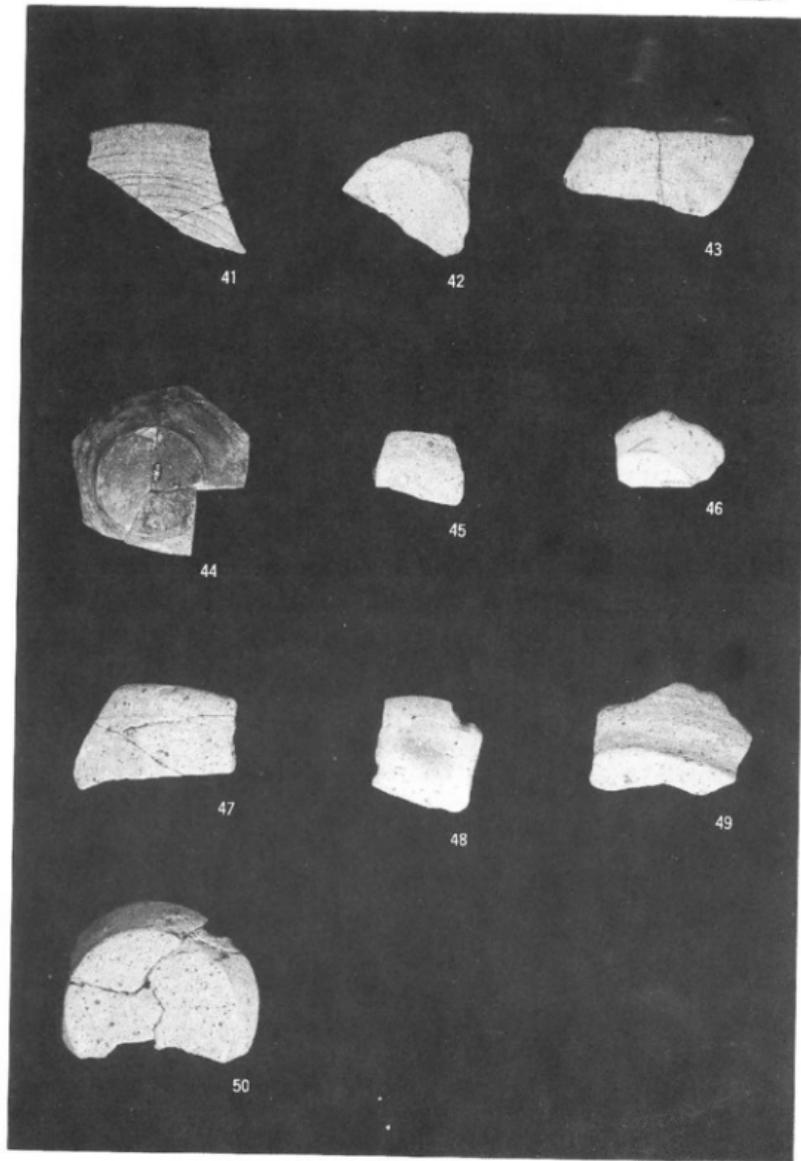
遺物出土狀況



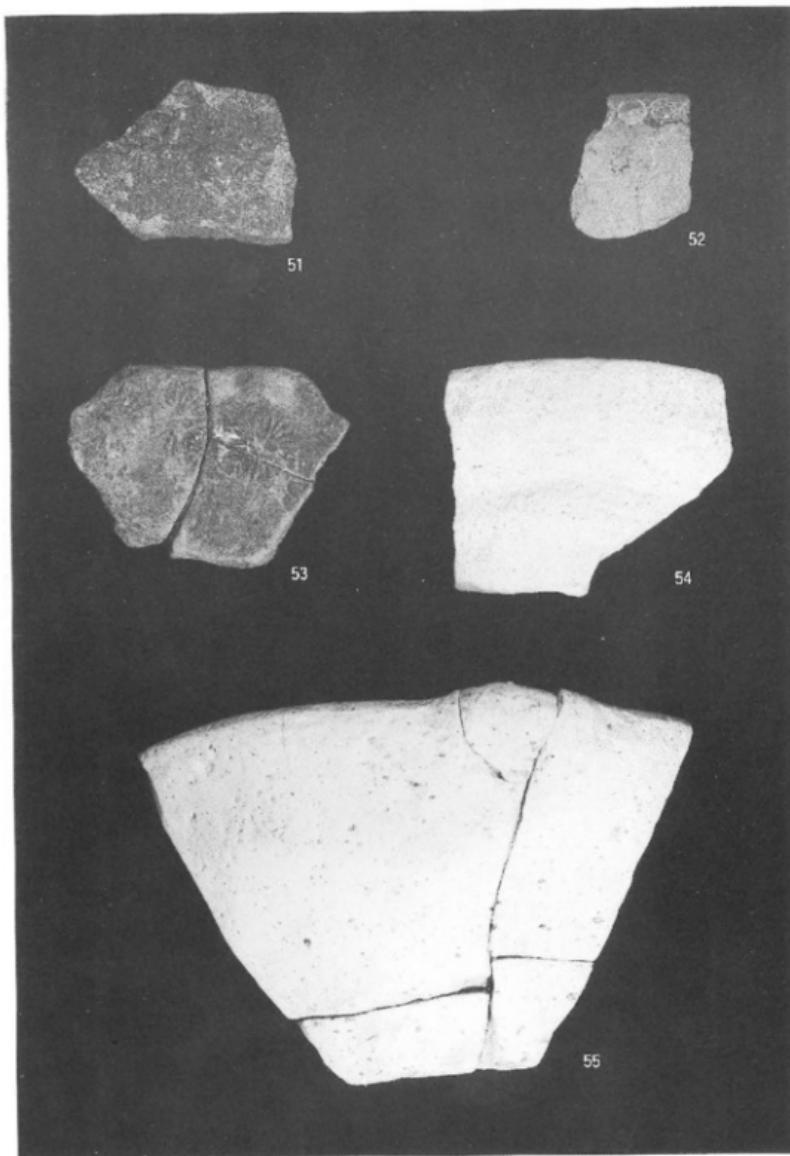
輸入陶磁器(1)



輸入陶磁器(2)



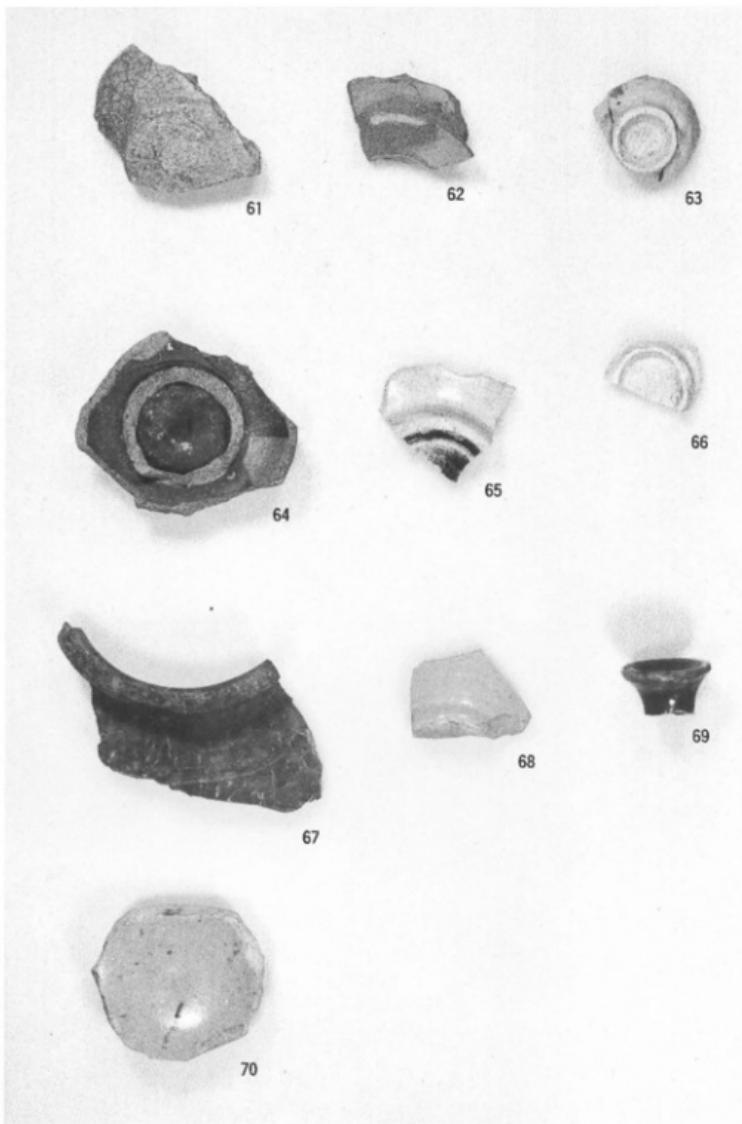
国内産の中世遺物(1)



国内産の中世遺物(2)



その他の中世遺物



近世の遺物



川井川内出土の宝篋印塔



ちょいのどう所在の石塔群



富永氏宅裏の五輪塔



安全寺跡から町教委庭に移された石塔群  
町内所在の石塔群(1)

図版16



里郷喜場楠本氏宅裏五輪塔



清心寺跡用水路堤五輪塔



千綿宿牛の頭五輪塔

町内所在の石塔群(2)



ひさご塚古墳(南から)



(北西から)



ワレ権現塚古墳  
(南東から)

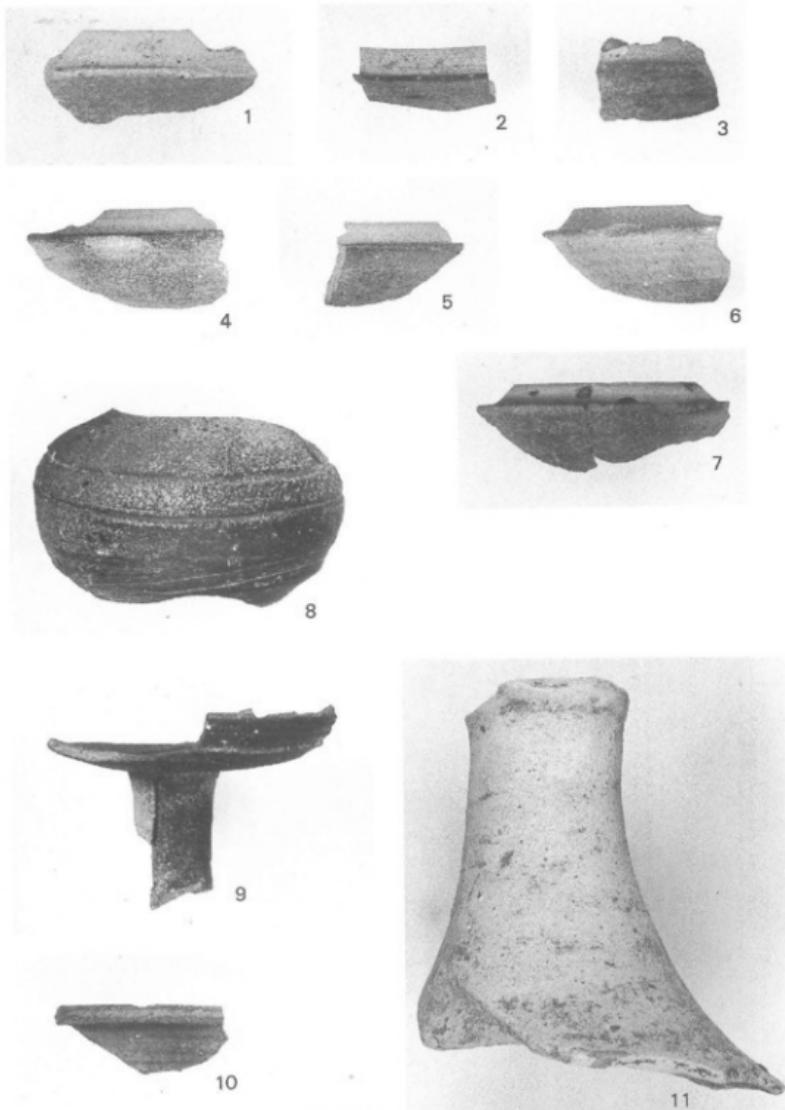
ひさご塚古墳・ワレ権現塚古墳



彼杵川古墳群から川井川内遺跡方面を望む



彼杵川古墳群



彼杵川古墳群出土の遺物

東彼杵町文化財調査報告書第1集

川井川内遺跡

昭和61年3月31日

発行 東彼杵町教育委員会  
〒859-38 長崎県東彼杵町彼杵宿郷483番地

印刷 川口印刷株式会社  
〒851-01 長崎市田中町1020-7